

……です。

試し読み版！

お嬢様とメイドちゃんの
Lady's & Maid's
Peeing Anthology おしっこ小説誌



ミルクレープ試し読み版 目次

恥カノ。おねしょお嬢様と蕩けるメイドちゃん	……003
著：もちづきうずめ 表紙イラスト：毒桃	
困らされる幸福	……013
著：AJ	
アナタの気持ち、ワタシの気持ち	……025
著：軟球ころん	
さよ様のおしっこ事情	……033
著：にゃこ 絵：まよ	
不運な彼女と幸運でもない私	……043
著：ゆっきゅん	
参加者紹介	……053
奥付	……055

恥力ノ。おねしょお嬢様と蕩けるメイドちゃん

もちつきうずめ

「樹里はおむつなんてはかないからね！」

お屋敷におこさまのただっ声が響き渡る。

ためらいがちに差し出された紙おむつがはたき落とされ、床に跳ねた。おむつを勧められたお嬢様は歯を剥き出しにして目をつり上げ、手を叩かれた自称従者は真顔——に見える憂い顔で落ちたおむつを見つめていた。

「あ、痛かった？」

「いえ、別に」

「叩いてごめんね」

お嬢様・樹里はおむつを拾い上げ、かんなに手渡した。

「はい。でもね、樹里はおむつはかないからね」

ああ、やつぱり。自称従者・かんなはお嬢様に叩かれたことに心を痛めているのではない。樹里だつて本気でおむつを叩き落とす強さではたいしたわけではない。ちよつと埃を払う弱さで払ったつもりだったのだから。その程度でかんながおむつを落としたのは、少なからず嫌悪を向けられたショックがあつたから。

「普通のパンツで寝る！」

反発されることは、わかりきっていた。寝る前におやすみの挨拶をしに來たらちゃんと提案しようと、一時間も前から覚悟していた。

——おむつを拒絶され、機嫌を損ねてしまうことを。

嫌われたおむつを拾い上げ、努めて冷静に、燃え盛る炎に息を吹き

かけないように言葉を選ぶ。

「ですがお嬢様、これは恥ずかしいものではないのですよ」

「樹里子どもじゃないからそんなものいららないの！」

ただし最善手と瞬時に判断した……着用への羞恥をほぐすべく選択した説得は、彼女を納得させるどころか火に油を注ぐだけだった。

子供扱いに涙目で怒る、お嬢様。

「なんでそんなひどいことするの」

「何もひどいことは、」

「ひどいよ！ 樹里はおむつが必要な年齢じゃないもん」

見た目は中学生、ときには小学生高学年に間違われることもある樹里だが、彼女は都内のお嬢様学校に通う高校一年生。おむつに夜の安心を委ねる年齢ではない。だが、それは日常的にという話であつて。

「お嬢様、今朝のようなことがないよう、今晚は念のためにですね」

「いらない！ 樹里もおねしょなんかしないもん！」

初鹿野樹里はまだおねしょが治らない。
今朝もお布団に体温に馴染んだおしっこを染み渡らせてしまい、朝からシャワーや着替えにとかんなの手を焼かせていた。登校前にかんなが寝具の片付けをしている間はしおらしく反省していたが、就寝前には自省の念も薄れおむつを毛嫌いしている。

「お嬢様、今日だけでいいのです。毎日着用してくださいとは言っていないのですから」

「やだやだやだ！ 寝る前におしっこするから大丈夫なの！」

「もしかして昨晚はお手洗いを済ませずにご就寝を？」

顔を背ける。かんなの私室で団らんを楽しんだ後、眠気に負けてト

イレを通り過ぎてベッドに吸い寄せられたことを、樹里は今の今まで黙っていた。不都合だったから。

「今日はおしっこしてから寝るから大丈夫なの!」

強気になれる根拠はないのに、意地を張る。いじっぱり、わがまま、大人ぶる。

(高校生にもなつて今年二回目のおねしょをしてしまっていて、もうしないとさすがに豪語が過ぎます。と指摘できたらどれほど楽なことでしょうか)

思いついた速度で喉から出かかった言葉をぐつと飲み込む。

かななは賢かった。正確には賢くなった。意固地になつているお嬢様に事実を突きつけることは逆効果。今までおこさまの気持ちを逆撫でして逆上させたり泣かれたことは数知れず。かななの指摘に正しさともっともらしさがあつたとしても、伝わらなければ意味がない。言葉を選び、表現を柔軟にして、理解してもらう。

「お布団に入る前におしっこを済ませて、その上でおむつも履いて眠られたら安心ですよ。翌朝気持ちよく起きて、楽しく一日をスタートさせられたら、いいと思いませんか?」

「おむつしてたら楽しくないの!!」

説得を成功させる。それができたらメイドちゃんも苦労しない。

「明日は金曜日、学校ですよ。またおねしょをしてしまつて、暗い気持ちで登校するのは、嫌ですよね?」

「おねしょしないから関係ないっ。おむつはきたくない! いらない! そんなに押しつけるなら寝る前のおしっこもしないから!」

「意味のないだだをこねないでください。はあ……。なんだかお手洗

いに行きたくなつてきました。樹里お嬢様、今から一緒におトイレに行きませんか」

「一緒に、行つてくれるの?」

眉を尖らせていた樹里が僅かに落ち着きを取り戻した。滅多にトイレに誘つてくれないかなが、一緒にトイレに行こうと言う。なんでもかななと一緒にいい樹里にとつて、感情のままに振り切れない申し出だった。

言うまでもないことかもしれないが、かななの尿意申告は嘘だ。意識を引つ張られるほど膀胱は膨れていないし、就寝前に済ませる習慣が身につけているので今すぐ排尿する必要はない。

「樹里お嬢様が催されていないなら、一人で済ませますが」

排泄時の臭いや音の共有を忌避するかななは、自分からトイレへの同行を促すことはほとんどない。外出中によほど我慢できないときは勇気を出して告白するが一緒に行くとうまでは言わないし、言えない。樹里がトイレに行きたがらないときの切り札、だったりする。

「私も寝る前におしっこをしないと寝ているときは不安ですから、ね、樹里お嬢様とおトイレに行つて、すっきりさせておきたいのです」

「そっか、うん、かなながおしっこしたいなら、トイレに着いていつてあげるっ。樹里もおしっこする……っ」

さっきまで言うこと全てに声を荒げていたお嬢様だったが、嬉しさを隠せずに口の端を緩ませた。外出中はトイレに行きたいと言えば着いてきてくれるが、自宅では就寝前に誘つても「樹里ちゃんは一人でおしっこできませんか?」と固く断る。

かななは手を差し伸べ、

「さ、おしっこしましょうね」

「うんっ。……なんでおむつも持って行くの」

「一緒におしっこをしたなら、お部屋で私がおむつをはかせてあげますね。そうしたらお眠りになるまで一緒にお話ししましょうか」

「おむつは置いていって」

「ですが、」

「おしっこはするけどおむつはやだ。おしっこしたら大丈夫だもん。」

そんなに樹里におむつさせたいならかなもおむつして」

「え……」

「恥ずかしいことなんですよ。かながおむつするなら、樹里もしてあげてもいいよ」

「それは……あの」

「ほら！ やっぱ恥ずかしいことなんだ！ じゃあ樹里もしない！ ぜったいに普通のパンツで寝る！」

もう少し、ちょっとだけかなに融通の利く機転の良さがあれば樹里が一層深く口の端を尖らせることはなかっただろう。トイレに誘うことで一緒にいたがりのお嬢様に排尿を促す思いつきはできても、一緒ににおむつを着用する意思を示して心理的ハードルを下げるまでの着想には至らなかった。つまるところかなも、おむつを着けた姿を敬愛する者に見られたくはなかった。

「かなも恥ずかしいように樹里も恥ずかしいの！ やなの！」

一緒にはいた後にこっそりと脱ぐずるさ／賢さそして妥協がお嬢様とメイドちゃんにあれば、こうも譲らずぶつかり合うことはなかったかもしれない。

「おむつやだ！ いやなの押しつけないで！」

「はあ、もう、お嬢様のことを思っ言っているのですっ。それにおねしよをしたならおむつを穿く約束でしょう。樹里ちゃんはお約束が守れますよね？」

早口に言い連ねて、かなは後悔した。ついカッとなって樹里の嫌がる押しつけを——感情的なときに受け入れられるはずのない、約束を取り出してしまった。

「約束なんて知らないっ！ かななんかない!!」

固く握りしめられていたはずの従者の手は、容易く振り払われた。

「あう、あのっ、お嬢様っ」

「来ないで！ かなのばか！ ……あつ。樹里寝る！ おやすみ！」

騒々しくスリッパを踏み鳴らし、ドアを叩き閉めて去って行く。閉扉の音は放心しかけていたかなの心臓に痛々しく響いた。

「お嬢様、あ。あう……」

（謝らないと、かなが悪かったです、と、でも、かなは樹里ちゃんのことを考えて……約束も、はあああ）

追いかけようとドアノブに手を掛ける。だけど回せない。深い深い溜め息を吐いてその場に立ち尽くす。

「また、間違えて……」

樹里に受け入れてもらうべく言い回しや表現に気を遣ったつもりだった。おねしよの事実を責めず、安心して翌朝を迎えるためにおむつを使いましょうと論じたつもりではあった。

以前のおねしよの際に結んだ約束——またおねしよをしたら、しばらくおむつをすること。反省し、また失敗しないためにその日は承諾

してくれていたから素直に穿いてくれるだろうと思っていたが、月日が経って決意が揺らいだのか、約束を盾に自身の幼さを突きつけられて惨めな思いをしたのか……指切りは破られた。

（おむつに固執したこと、約束を押しつけたことが悪かったのでしょうか、でも約束したのです……。かなだつておむつを穿くのは嫌です、樹里ちゃんにそんな姿見られるのは、でも）

五分近く天井を仰ぎながら呆然とし、やがて疲れてよたよたと歩き、ベッドに倒れ込む。やりかけだった予習のことを思い出したが、一文書も書く気力はなかった。

（樹里ちゃんに嫌われて、しまいました……。明日どんな顔をして会えば、いつも通り……おねしょしてませんねって褒めてあげて、そして謝る……そういえば樹里ちゃん………おしっこ、済ませたでしょうか。はあ、明日が土曜日ならよかったのに——。）

微睡みに手招きされ、メイドちゃんは眠りに落ちた。



じゅいじゅいじゅいじゅい……！

「はあ……！」

放熱に伴う解放感か、冷めやらぬ怒りが発する唸りか……洋式便器に腰掛ける少女はむくれた表情で排尿をしていた。興奮していて力がかもっているのか水面（トラップ）を打つおしっこの勢いは強く、泡だった音が響いている。

「かななことなんか、きらいっ」

やがて排尿を終え、短く巻き取った紙で適当に股間を拭い、水を流す。さつとショーツとパジャマを穿き上げ、半開きだったドアを押してトイレを出る。

トイレと洗面スペースの照明、そして廊下の間接照明が夜の闇を照らしていた。

「かな……？」

闇の中に、期待していた従者の姿はなかった。

「ううん、樹里悪くないもん」

手を洗い、トイレを後にする。途中振り返るが誰かがいるはずもなく、開けばなしで照明も落としていないトイレから光が漏れているだけだった。

「だってかなが、嫌なのにおむつ押しつけるから……」

私室のドアを開ける。でも一步を踏み出せない。視線はずつとかなの部屋の方へ向いていた。

悪いのはかなの方。これは譲れなかった。嫌なものは嫌で、頑固になって聞き入れてくれない方が悪い。

だけど。感情的になって、約束を破ってしまった。誓いの大小なんて関係なく、とっても大事な、お約束。

「でも、ごめんなさい、しなきゃ」

かなの方から来てくれたら、楽なのに。一〇秒ちよつとの悩ましげな視線の先に入る人影はなく。踵を返そうと床板に体重をかけて、やつぱりためらう最初の一步。

「ふんっ。かなが謝りに来るまで、樹里は許さないもん」

理屈と正しさで自らを律し、運営することは難しい。思ったままに

感情をぶつけて、想ってくれたかんなを払いのけた——反省の意はあるが、従う気にはなれない。かんなの言いつけにも、素直になりたい自分の気持ちにも。

ベッドに入り、布団の暗闇に潜り込む。足音もノックも聞こえない。(こんな嫌な気持ちになるなら、やっぱりおやすみなさいしに行かなきゃよかった)

先に寝る方がおやすみを言いに行く。二人の間で取り決めた約束の一つだった。それも樹里の方から取り決めたもの。就寝前に会いに行けばおむつを勧められるのは分かりきっていたものの、おねしょをしてからずっとおむつの話はなかったから、大丈夫だとかんなの私室を訪れた結果が心のもやもや。

(もうおねしょなんてしてしないもん。ちゃんとおしっこしたい、いっぱい出たから大丈夫)

反発したくて寝る前のおしっこもしないと豪語したが、さすがにトイレには寄った。これで予備用の敷き布団すら黄色く染めてしまっただけじゃないと二度と強がれない。……真っ直ぐ私室に逃げ込まずにかんなが追いかけてくる時間が欲しかったのもあった。

(ちゃんとおしっこしたから大丈夫、樹里はもう高校生だから、ぜったいにおねしょなんかしないから——)

○○○

微睡みから目覚める。カーテンからこぼれる目映(まばゆ)い朝日が寝ぼけた瞳をあたたかく採みほぐす。

朝……。あつ！

上体を起こし、布団をめくり上げる。眠たくて時計も見えないほど寝起きが悪いのに、やけにはつきりと覚醒した。

「あ、おねしょ、してない……っ！」

敷き布団のお尻のところはどこも濡れていないし、お股もべちょべちょしてない。っ——んとした匂いも漂ってこない。

「ほらっ！ 樹里おむつしなくても大丈夫！」

ちゃんと寝る前にいっぱいおしっこ出したんだもん、おねしょするわけないよねっ。樹里もう高校生だから二日も連続でおねしょなんかしないんだから。

でもちよっと心配だった……。かも。おしっこ済ませたっておねしょするときはあったし、これでお布団汚しちゃったらかきとかなんも怒るよね。あんなに注意したのに、心配したのにつて。かんなの忠告を無視しておねしょしてたら、嫌われちゃうかも。

で、でも今日はちゃんとお布団汚さないで起きられた！ ふふん、人のトイレの心配ばかりするかなんもこれなら文句ないよねっ。

ふるる……っ

おしっこ、したくなってきた。

「トイレで、おしっこしなきゃ」

せつかく気持ちよく起きられたし、寝起きなのに今日は目が冴えてるし、おしっこ済ませよつと。でもトイレでおしっこしないと。あれ、樹里なんか変なこと言ってるかな。

トイレでおしっこするのは、当然のことなのに。なんか引つかかるなあ。昨日おねしょして朝にトイレ入ってないから、かな。

まあいつか。トイレ行こつと。

こん　こん

「お嬢様、失礼しますね」

あ、かなだ。もう起こしてくれる時間なんだ。

そつとドアを開けて入ってくるかななの姿を見て、ぴよんとベッドから降りて駆け寄っていく。

「おはよう、かなっ!」

「おはようございます、お嬢様。今日は早起きですね。今日が土曜日で学校がお休みだからですか?」

「今日土曜日だっけ?」

「そうですね。学校のある日もそうやって起きてくださると、とても助かるのですが」

「それより、それよりね!　樹里今日はちゃんとおねしょしないで起きられたよ!」

かなはまず樹里の足の方を見て、次は離れたベッドを見つめる。そうして樹里の顔をまじまじと。

「おねしょしたのを隠したくて、空元気ですか?」

「ひどい!　ほら見て、これ昨日はいてたパンツでしょ!　濡れてないよ。ほらっ」

あんまりにもかなが疑うのでバジャマを下ろし、パンツを中を見せてあげる。赤面しながらそつと覗いてくる。

「濡れてないし、おしっこ匂いもしないでしょ」

「そうですね。おねしょしないで起きられるなんて、樹里ちゃんほえらいですね」

そう言つてなでなで。かなが樹里の頭を撫でてくれる。

「んふふ」

「ちゃんと寝る前におしっこしたら大丈夫だもん。おむつなんかいらないでしょ。あ……昨日は嫌いつて言つてごめんね」

「いいんですよ。私こそ言い過ぎましたから」

よかった、仲直り。かなが怒つてたらどうしようと思つてたけど、樹里もちゃんと謝れたし、これでいいよね。

「さ、お嬢様。今日はお出かけのお約束でしたね。朝ご飯を食べて一息ついたら、お買い物に行きましょうね」

「そうだっけ?」

「おやおや。ちゃんと起きられたのにまだ寝ぼけていらつしやいますか?　やつぱり樹里ちゃんは私が起こしてあげないとだめですね」

「今日はちゃんと起きられたのに子供扱いしないでっ」

お出かけするんだっけ、あ、そうだったよね。お洋服とか買つて、一緒にお昼ご飯を食べて、かなと楽しく過ごすんだつた。

「スープが冷めない内にダイニングに行きましょう」

「うんっ!」

○　○

今日の朝ご飯はクロワッサンとオニオンスープ。サラダもしゃきしゃきでおいしかったし、スクランブルエッグは半熟気味でとっても甘いやつ。今日はかなな機嫌がいいのかな、樹里が一番好きな味付けになつてた。

一緒に洗顔と歯磨きをして、お着替えは……出かける前でいつか。

「あ、トイレまだだった」

朝食後に身だしなみを整えたらトイレの時間。

樹里はお便秘で毎日うんちが出ないから、ご飯の後でお腹が動きそうなときにトイレでがんばってる。とうかかんが朝にうんちをする習慣をつけるようにって無理強いしてるんだけどね。したくないのに毎日トイレに押し込まれるのはやだけど。

「お嬢様、今日は出そうですね？」

「ううん、全然」

「トイレでがんばってみます？」

「出そうじゃないからいい」

「そうですね。じゃアリビングでゆっくりテレビでも見ましょうか」

あれっ。いつも樹里が嫌がっても何度かトイレに促すのに。なるほどね、昨日樹里とけんかしちゃったのを気にして、機嫌を伺ってるんだ。別に樹里もう気にしてないのに、なんか調子ずれちゃう。

顔色を変えず歩いて行くかんなの後ろを着いていく。どうしよう、やっぱりトイレ行こうかな。そういえばおしっこしてないし。

振り返ると、二階のトイレはいつの間にか遠いところにあって、階段まで歩いてきていた。

まあ、いつか。

お出かけ前に済ませよつと。

「お嬢様、紅茶を淹れてきました」

「ありがと、かな」

かなと選んで買ったペアカップで鈍く光る、紅い湖面。飲む前からあつたかくなる香りがリビングに拡がった。

「おいしいね」

「ありがとうございます。朝食の後ですから一口だけですけど、パウンドケーキもありますよ。召し上がりますか？」

「やったっ。樹里元気だから食べられるよ」

樹里はレースンきらいだけど、パウンドケーキのドライフルーツなら好き。ふかふかのスポンジ生地の中に果物の甘みが弾ける。

「はくあつたかい。今日は寒いから、ちようどいいね」

「ええ。ちよつと曇り空ですが、お出かけには差し支えないでしょう。それほど肌寒くはないようですし良かったです」

一二月の初め頃、お部屋は暖房が入ってるからいいけど、そろそろバジャマの上に何か羽織らないと寒いかな。

「そろそろお出かけしましょうか」

一緒に見ていた旅番組は終わっていて、時刻は一〇時を迎えようとしていた。

「身だしなみを整えてあげますから、お部屋に行きましょう」

食器を片付けてから、樹里のお部屋に。

髪のお手入れの前にバジャマから制服に着替えて、お化粧台に座る。軽く櫛は通したけど、まだ髪を結ってもらってないからかなに髪を梳いてもらう。

あれ。お出かけなのに制服着ちゃった。土曜日のはずだから、学校ないのにね。まだ寝ぼけてるのかな。

「今日はどのリボンにしましょうか」

「いつものがいい」

「これですね。樹里ちゃんは本当にこのリボンが好きですね」

「だってかんなが最初にプレゼントしてくれたやつだもん。今日はかなとお出かけだから、これがいいの」

いつもの、ピンクのリボン。かななの慣れた手さばきで結われていくのを鏡越しに見るのが、好き。

「かななっ」

「どうしましたか？」

「なんでもないっ」

たまに目が合つて、かななが微笑んでくれるのも、好き。

「終わりましたよ。今日もかわいいです」

「とーぜんでしょ。んふふ」

「ではかななも着替えてきますね」

かななは樹里を起こしに来る前に髪型をばっちり整えてるから、着替えるだけ。

「いつもありがとう」

「お嬢様だけの使用人ですから、当然の仕事です」

「あー！ また自分のこと使用人とか言ってる。だめって言ってるでしょ」

「ですが、そうなので」

「ちがうの！ 樹里とかんなは家族なんだからね」

いっつも何度も言い聞かせてるのに、かななは自分のことを使用人って言う。確かにご飯とか色々助けてくれるけど、そういう関係じゃないのに。家族になつてもう何年も経つのに。

やめてと言っても不服そうにして言い直すことはない。

だから樹里はたまに、

「樹里のお家の使用人ならちゃんとメイド服着てよね」

「はい」

と言いつ返すと決まつて「それは恥ずかしいので」と困り顔をするから……あれ？

「では今日はメイド服で過ごすことにします」

「え。いいの？」

「お嬢様が着るように命じられたのではないですか」

「うん」

「では着替えてきます。玄関でお待ちくださいませ」

すたすたと樹里のお部屋を出て行く。

「いっつも嫌がるのに。かなな、機嫌いいなあ」

そんなに樹里とお出かけするのが楽しみなんだ。

玄関でうずうず三分。

「お待たせしました」

真顔で上階から降りてきたかななは——本当にメイド服。驚いて固まる樹里の前でスカートの裾をつまみ、くるり一回転。真顔で。

「どうですか」

「すごい！ かわいいね！」

ヘッドドレスに洋風なワンピースとエプロン、白いソックス。お靴は登校用のローファアのままでけど。見た目はアニメの中やお友達のお家で見える、メイドさんそのものだった。

「照れますね」

「かわいい！ かななに似合うね」

どれだけ着せようとしても頑なに袖を通さなかったのに、今日は相当機嫌がいいみたい。プレゼントに送った日も、珍しく鼻唄を歌っていた日も、樹里が許してあげる交換条件として提示した日も。着てくれることはなかったのに。さすがに無理すぎて最近はや談で言っただけなんだけど。

「さあ、お出かけしましょうか」

「うんっ！」

樹里はおねしよしなかったし、かななはとってもご機嫌でかわいいし、なんだか夢みたい。

きっと今日はすっごくいいことがありそう！

かななに手を引かれ、お家を飛び出る。樹里が手を繋ぎたがって引つ張ることはあるけど、かななから手を繋いでくれるなんて。そんないいことがあったのかな？

あ、そういえばトイレ行き忘れちゃった。まあ、大丈夫だよ。

曇天からこぼれる陽光に包まれて、軽快な足音を残して駆けていく。

困らされる幸福

A J

御巫恵理子みかづき へりこは親が子をなだめすかすかのようになり、向き合った少女の頭を撫でていた。

恵理子の背丈は、女子としては高い百六十八センチメートル。一方で、頬を朱に染め、受け入れる少女は恵理子よりも頭一つ分程小さい。その身長差から、本当に親と子供であるかのようにも見えなくもなかったが、しかし彼女らは同じブレザータイプの上質な制服に身を包み、学年を示すリボンの色もまた同じであった。

「そんな悲しそうな顔しないで悠里。家ではいつも一緒じゃない」

恵理子が極めて穏やかな声色で語り掛ける——やはり、親が子にするように。対して、頭の頂点から伝わるこそばゆさを心地よさそうに受け入れながらも、どこか不満な表情を消そうとしない少女は、刺々しさを含んだ口調で返す。

「生徒会役員のお仕事も、部活動も忙しいですものね。お嬢様は」

「拗ねないでよ、もう。忙しいのは本当なのよ」

悠里と呼ばれた少女が、切なげに感情の籠った視線を向けるが、恵理子は動じていない。温かい感情を相手に向けているのはその声色からも分かるが、決して熱くはない。

「ええ、分かっています……ごめんなさい。お嬢様を困らせるつもりはないんです」

俯いたまま、悠里は小さく、言い訳じみた言葉を零す。

「悠里に困らされるのも、嫌いじゃないのよ。私だっていつも悠里を

困らせてばかりだしね」

恵理子の言葉は、きつと嘘偽り無い本心なのだろう。それは喜ぶべきことで、それで満足するべきなのだろう。けれど、もっと、もっとその心の全てを向けて欲しいと願う感情は、悠里の中で年月を経るごとに大きくなっている。

「私も、お嬢様と同じ気持ちです」

悠里も嘘はついていない。向けられた言葉に、自身の頬が緩んでいるのは確かな事実なのだから。

「さあ、そろそろ会議が始まるし。私は行かないとね」

少女達——御巫恵理子と笹原悠里は、校舎の片隅の廊下でしばらくの間向き合い、幾つかの応酬を経て、再び歩き出した。彼女らが授業を受ける教室から、別の建物の片隅にある生徒会室までは相應の距離がある広い校舎だ。そして人気の多い場所に出て、すれ違う生徒達は、制服を校則に定められた通りに身に纏い、少女らしく淑やかに歩いていく。無論、廊下を走る者など皆無だ。そして生徒に男子はおらず、皆女子である。

都会の中心部にありながら、外周部を樹木で覆い外界と隔絶した広い敷地。古めかしく荘厳な外観の校舎の数々。素朴ながら上質な調度品と最新鋭の機器で飾られたその内側。そしてそこで学園生活を謳歌する生徒達の立ち振る舞いの上品さ——どれを取っても、名門校らしい様である。もっと俗っぽい言い方をすれば、お嬢様学校と形容する

のが相応しかった。

そんなお嬢様学校といえど、そこで勉学に励む少女達全員が、使用人を従え、運転手付きの高級車で通学する絵に描いたお嬢様のような生活を送っている訳ではない。皆、育ちが良く、経済的にも情操的にも恵まれた家庭に生まれた者が多からうが、大概は一般的な家庭とその暮らしぶりが大きく変わる訳ではない。

だがそれでも、名門校らしく、そこには本物のお嬢様も少ないながら居る訳で――御巫恵理子という少女もその一人であった。旧華族の血を引き、彼女の家格の高さは、分家筋ながら中等部と高等部で構成される学園の中でも折り紙付きである。それこそ本当に、自宅には使用人が居て、身の回りの全般をこなしてもらっているし、運転手の付いた自動車の後部座席で悠々と座っているのが彼女にとつての登下校なのだ。

勿論、身分と資産だけが少女を淑女たらしめる訳では決してない。まず、幼い頃から教え込まれ、躰けられた恵理子の立ち振る舞いは柔らかくも切れ味があり、級友達よりも遥かに洗練されていた。学業成績も当然の如く上から数えた方が早く、各種の手習いを修め、特に今でも続けている弦楽の演奏は大きなコンクールで入賞する程の腕前である。

そして、そのような類稀なる生まれと能力を誇らず、気品高くもどこか親しみやすく、誰とでも分け隔てなく話すその気質こそが何よりも周囲から慕われる所以であった。伝統的に、相応に真面目に選挙戦が行われる学園において、生徒会長の座に収まっているのがその証左であろう。

「では、お嬢様。私はここで……えっと、今日の夕飯はロールキャベツにします。以前も美味しいと褒めてくれましたけど、今度はずっと、上手に作れるかと」

生徒会室と表示のある扉の前で、悠里は俯きながら、熱っぽく話した。その脳裏には、数か月前の、恵理子からの絶賛の声が響いている。

「あら、それは楽しみだわ。遅くならないように頑張るから、待ってて頂戴ね」

恵理子は微笑みながら応えると、悠里に見送られながら、扉の向こうへと消えていった。

「はあ……」

悠里のその緩び緩みきった表情が一気に冷えていく。背丈だけ見れば小学生そのもので、幼さの残る童顔であったが、切れ長の目は鋭い。そして、漏れた溜息は、恵理子に休日の外出の誘いを断られたことを未だ引きずっていると言わんばかりだ。

断るということは別の先約があるということを示唆する。自分ではない誰かと、楽し気に休日を通している恵理子の姿を想起するだけで、悠里の心は揺れ動く。

そのように考えると、やもすれば泣き出してしまいそうなくらいに感情が沈んでいくが、それでも悠里は一つの事実を反芻しては、踏み留まる。自分は、恵理子と一つ屋根の下で暮らしているのだと。ほとんどの場合、一日で最初に彼女と言葉を交わすのは自身なのだ。秘密には家族ではないが、家族も同然に日々を送っているのだと――悠里という少女は、御巫家に仕える使用人であった。

御巫家にかつて仕えていた老家政婦は、幼少の頃にその両親を亡くした孫娘を引き取った。そして、まだ六歳であったその孫娘を、御巫家の一人娘へ、良い遊び相手となることを願って紹介した。それが、恵理子と悠里の出会いであった。

それから時が経ち、唯一の肉親であった祖母も喪い、天涯孤独となつた悠里は御巫家に引き取られた。本家への配慮からか、養子ではなく、使用人という立場であつたが、恵理子の父母は実家だと思つてもらつてもよいと言つてくれたし、恵理子はこれからも友達でいようと言つてくれた。しかし、元から祖母に倣つて恵理子は「お嬢様」と呼んでいて、自分だけがそう呼べるという優越感もあつてか、今でもそう呼んでいる。特別なことはしなくてよいと言われながらも、幼い頃から祖母を氣遣い家事をこなしてきた悠里にとって、使用人らしい仕事をこなすのも苦にはならない。

彼女自身、平均的な少女と比べれば不幸な身の上だと思わないこともないが、それでも日々は満ち足りている——そうはつきりと断ずる時に、いつも恵理子の笑顔が浮かぶのは、敬愛すべき主人なのだからと、或いは長年寄り添つた一番の親友なのだから当然だと考える。もう悠里も、十五歳になるといふのに、それ以外に思い当たるところは無いようであつた。

「それにしても、やつぱり意外と少女趣味よね。悠里は。その熊のぬいぐるみも、その水着もとっても可愛らしいわ」

両手で買い物袋を大切そうに握る悠里は、恵理子の言葉にむず痒さを感じ、赤面するばかりであつた。

「あんまりからかわないでください……別に今に始まつたことじゃないんですから」

日曜日。恵理子と悠里は、邸宅から車で三十分程の場所にある百貨店へ、買い物と食事の為に訪れていた。恵理子はいつものように、穏やかそのものの表情である。一方、悠里と言えはいかにも楽し気で、まだどこか熱つぽい。それでも、恵理子の予定が変わり休日に出掛けられると分かつた時と比べれば、大分落ち着いているのだが。

「せっかく水着も新調した訳だし、今年の夏もちゃんと海水浴に出掛けられたらいいわね」

恵理子が微笑みかける。悠里としては、近場のプールでも何でも、自身のものとは対照的に大人びた水着に身を包んだ、あるべきところに肉の詰まつた、締めるべきところの締まつたその肢体を、何が何でも拝みたいというところだが、例え同性といえど秘めるべき欲望だと理解しているので、当たり障りのない答えを返す。

「私達だけなら、近場のプールでも十分楽しめるかと思いますが、やはりご家族でなら、別荘に行つた方がいいですからね」

「……まあ、家族といつても今年は、お母様は帰国できなさそうなのだけだね」

恵理子は常に、誰に対しても、無論自身の従者に対しても微笑みを振り撒き、その感情を露骨に表に出すことは滅多にない。人の上に立つことを運命付けられた、名家の令嬢らしい振る舞いだ。だが、そこには人間らしい喜怒哀楽が存在していて、今の言葉に含まれていたの

は僅かな怒りと哀しみである——連れ添って十年近くにもなる従者は、微かな心の震えでさえ、捉えてしまう。

「そう、ですね。公使ともなると、お忙しいのかと……残念です」

主人が哀しみに寄り添うのも従者の役目。その分、自分が楽しませますから——そう言いたげな視線を投げかける。

「だから……今年は、別荘に部活動の友達を招待する約束をしているわ。良い人達だから、悠里ともきつと仲良くなれるよ」

私だけでは駄目でしょうか——

「いいですね。賑やかになりますし、お父様も喜ばれると思います」

——妙なことを言って、また恵理子を困らせたくはなかった。

少々の時が経ち、雑貨屋での買い物——悠里はまた少女趣味だからかわれながら——済ませ二人は再び喧騒の中を歩き出した。

「お嬢様。流石に混んでいますし、まだ早いかもしませんが、そろそろ帰りましょう。お店も大方回れました」

「そうですね。夕飯の食材は、近くのお店でもいいものね」

恵理子は定められた矜持に従って、どんな時も冷静である。しかし悠里の視線は鋭く揺らぎを捉える。従者は、主人を見つめる——言葉に混じった微かな安堵。数十秒程前に見せたほんの僅かな震え。一瞬だけ案内板の赤い人型のピクトグラムへ向けた視線。食後に飲んだたつぷりの紅茶……それらが全て一つに繋がっていく。

「お嬢様。帰る前に、お手洗いに寄ってもいいですか」

淑女たるもの、包み隠すべきとされる行為——淑女とて、避けられぬ生命活動——悠里は、それを「したい」と口にした。

「ええ、いいわよ」

そう言いながら、二人は連れ立って歩いた。恵理子は用がないはずなのだから、待つていればよいものを、悠里と共に歩いて行った。目指す場所は、様々な店舗が立ち並ぶフロアの隅にある。休日の百貨店の女子トイレというだけあって、行列ができている。従者が、行列の最後尾に辿り着く直前に歩調を緩めると、順番は自然に恵理子が前に、悠里が後になった。

澄ました表情を保っているが、恵理子は尿意を催している。行列に並ぶ今ならば、それは誰の目で見ても明らかであるが、悠里はそれよりも前に気が付いていた……だからこそ、この場所に恵理子を導いたのだ。高貴であらなければならぬ主人が、どんなに取り繕ったところで高貴とはかけ離れた「排泄」という行為について、口に出さなくても済むように。

（やつぱり……今日も言い出せないんですね……お嬢様）

悠里がそう呼ぶだけでなく、真正正銘、恵理子は「お嬢様」なのである。あるべき姿を驕けられ、あるべき姿を常になぞっている。十五歳にして、父親に連れ添って格式高い宴席の場に出すことだって日常茶飯事だ。

（ほんの少し足踏みをされて……あつ、止まった……もしかして、かなり我慢していたのでしょうか……もう少し早く、気が付いてあげていれば……）

そうして、幼少の頃より、人前でその種の欲求を露骨に示すことを諫め続けられた恵理子という少女は、いつしか気を許している従者にすら、素直にそれを明かすことができなくなった。大用はおろか小用

ですら、出先で済ませるには相応の恥と折り合いをつけねばいけなくなつた。今ここに並んでいるのもまた恥で、きつと悠里が言い出さねば堪え続けていたに違いない。

だから、恵理子という乙女が隠し通さんとする欲求を見抜き、適度なタイミングで、無用な抵抗感を抱くことのないよう自然に、然るべき場所まで導くのもまた従者たる悠里の仕事であった。

(……私にぐらい言ってくれても、いいと思いますが)

まるで親が子にするような氣遣いに辟易した訳ではない。敬愛する主に使えることは、従者としての喜びであるし、大好きな親友の為になれることは何だとしてあげたい。しかし、もっと深い信頼が、どんなことだって包み隠さず言ってもらえる関係性が欲しいと願う心には無視できない。

そうして思いを巡らすうちに、順番が訪れる。恵理子と悠里が個室に入るのは殆ど同時に、加えてちょうど隣同士である。客を迎え入れるだけあって、清掃の行き届いた洋式便器には、温水洗浄便座が備わり、そして女子トイレというだけあって擬音装置まで据え付けられている。用を済ませるに全く不足の無い空間であった。

トイレに行くというのは、恵理子に抵抗無く用を足してもらうための方便に過ぎず、自身は昼食後に一度済ませてはいたが、とはいえ膀胱は全くの空とは言えない。何より、目の前の白い陶器は、その種の欲求を煽る力がある。だから、悠里も、きつと壁を隔てて恵理子がしているのと同じように、スカートの中に手をつたむと、薄い緑色の下着を膝まで降ろし、そして然るべき場所に腰掛けた。

「……ふ」

壁のスイッチを押すと、流水を模した電子音が個室を満たす。準備が全て整ったことを認識し、理性の抑圧が溶けていく。微かな吐息に合わせ、下腹に力が籠る――

ぶしゅい い い い い い い ー じ よ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ……

緩やかな黄金色の放物線が、白色の陶器に湛えられた湖面に注がれ透明をその色へと染めていく。元々大して量を留めていた訳でもないが、それでも内に秘めたものを解き放つ快楽は否定しようも無く、少女の心と身体を同時に満たしてゆく——理性的なやり方で、本能のままに小水を放つ。何の変哲もない、幾百幾千と繰り返してきた、これから縋り返していくであろう行為であった。

ちよぼぼぼぼぼ……しゅうううう……ぴちゃん……

「つ……はあ……」

偽物の水の音で覆い隠された、本物の熱さを持った水の音はあつさりと止まった。染み渡る爽快感に浸っていたのはものの三秒程で、すぐに右手が紙を巻き取るために伸びた。

じよぼぼぼぼぼじゅうつうつうつ

剎那響いたのは生々しい水の音であつた。排泄という本能を覆い隠してくれる電子音が定められた時間を終えて途切れてから、個室の中の者が慌ててボタンを押して擬音を再開させるまでの隙間を縫つて溢れた音はまさしく排泄そのものの。そして、その源は間違ひなく、患理子の入っている個室である。

（お嬢様……やはり、相当我慢をされていたんですね……）

その響きだけで、誰かが小用を足しているということも、その誰かがかなりの量の水分をその膀胱の内へ秘めていたということも、容易

に理解できてしまう。

(気持ちも分かりますが、いつでも行けるようにならないと……)

また言い出せなかったという事実を確信した悠里の心配が募る。その完璧さ故に守らざるを得ない戒めが、時にどのような結末をもたらすか……悠里は、そして誰より恵理子自身は、知っている。

(……あれから、もう二年になるんですね)

従者の相貌が、その深刻な心境を切り取ったように、歪んだ。

二年と数か月前。まだ恵理子も悠里も赤いランドセルを背にしていた。恵理子は、両親の方針で小学校は近所の公立校に通っていて、既使用人となっていた悠里も同じ学校であった。

恵理子は、今よりは幾分か幼い顔つきをしていたが、既にその立ち振る舞いは良家の子女として不足の無いものであった。何でもできたし、何でもやってみせし、それでいて決して飾ることなく、笑顔を振り撒く彼女には、誰もが憧れていたと断言できる。少なくとも、あの二月の末日の出来事が起きるまでは。

卒業を二週間後に控えたその日も、休み時間には恵理子の机の周りには人が絶えなかった。何かしらの理由を付けて廊下に出た時ですら、別のクラスの誰かに話しかけられていた。昼休みには、ちょうど彼女を中心に企画が進んでいた卒業を祝う会の打ち合わせで休む間も無かった——そしてその日は、雪がちらつく程に冷え込んでいた。

二年も経つというのに、恵理子も悠里もはつきりと覚えている。そ

の日の五時間目の授業の科目は算数であった。初老の男性教諭が黒板に記していく内容は、中学受験を経て難関校に合格した恵理子にとっては退屈なものであったに違いない。

それでも、優秀さを鼻に掛けず、真剣に耳を傾け、板書も丁寧に書き写す恵理子であったが、その日、その時だけは様子がおかしかった。ずっと立ち着きなく脚を揺すり、しきりにその身を震わせ、一分に一度は時計を睨みつけていた。手習いの一つであった書道で鍛えた端正な文字も次第に崩れ、最後には白紙だけが残っていた。

周囲の児童も、教師も誰一人として恵理子の異常に気が付くことはなかった。従者たる悠里ですら、席が隔たっていたこともあり、見逃してしまっただけだ——恵理子が、熾烈な尿意との闘いの最中にあるというのを。

その欲求も、それを解消する行為も、恥と断ずる恵理子にとって、膨らみ続ける水風船の中身を、相貌を歪ませる程の苦しみの根源を悟られぬことは、幸運に違いなかった。しかしそれは同時に、六年間の小学校生活の終わりに起きた、六年間で最大の危機の最中にある彼女に、誰も救いの手を差し伸べられぬ不幸であった。無論、何よりの不幸は、彼女が手を挙げるだけの勇氣を持てなかったことであろうが。

鉛筆を折れそうなくらいに握り締め、押し寄せる波に唇を引き結びながら悶え、がくがくと震える脚を諫め、それでも止められなくて……潤んだ瞳で見つめるかつてない程に動きの鈍い時計の針に絶望させられ……そして、熱水を辛うじて押し留める決壊寸前の水門を、直接手で押さえ始めた時ですら授業は十分を残していた。

一秒だって我慢ができない。我慢を止めたい。トイレに行きたい。

おしつがしたい——惠理子の人生の中でこうまで、その不浄の陶器を想ったことは無かった——今後も更新されることはない願い——けれど、深窓の令嬢は染いた羞恥の心に押さえつけられ、椅子から離れられなかった。

耐えた。必死に耐えた。全身全霊を注いで耐えた。視界が真っ白になっても耐えて、思考が黄色に塗り潰されても耐えた。耐える以外に、彼女ができることなんてなかった。

猛る狂う本能と無情の運命が、理性と意思を引き裂いたその時、授業は五分を残すだけになっていた。寝起きに惠理子が行為を済ませてから実に七時間以上。偶然と恥で幾度となく機会を逃し、迎えた瞬間であった。まず最初に、怪訝な視線が集まり始める程に激しく揺さぶられた脚の、その付け根から一滴が溢れ、水玉模様、酷く歪な水玉を作った。次いで、止まれと叫ぶ心に逆らうかのように、しゅるしゅると、か弱い水流が布の内に生まれる。

ようやく凝り固まった意地を捨て、惠理子は手を挙げようとするが遅すぎた——もう両手を孔から離すことなんてできなかったのだから。教師が異常に気付き声を掛けようとするが遅すぎた——もう彼女は歩くことはおろか立ち上がることだって出来ないのだから。従者が全てを察しその使命を果たさんとするが全くもって遅すぎた——その主に救いを待つ時間は残されていないのだから。

そうして、小刻みに動いていた脚が止まり、惠理子の全身から力が抜けていった。止めようもなく溢れる熱水が、下着を濡らした。欲望そのままに解き放った苦しみの根源が、赤色を基調としたギンガムチェックのスカートを濡らした。壊れてしまった、少女の「おんなの

こ」から生じる洪水は、着衣を濡らし尽くすと、六年間慣れ親しんだ木製の椅子を、やはり慣れ親しんだ教室のリノリウムの床を、一週間前に買ってもらったばかりの白色の靴下を、成長の喜びを感じながら半年前に履き替えた上履きを、全部飲み込んでいく。

一度たりとも聞いたことのない、惠理子のか細い悲鳴も、一度だって聞くはずのなかった、ばしゅばしゅと派手に水の叩き付ける音も、未だに悠るの記憶にこびりついている。そしてどちらも音も止んだ頃には、黄色をした水溜まりは、前後左右の席にまで達していた。その大きさが、惠理子の壮絶な苦しみの証左であった。恐らく、彼女でなければそこまで耐えることはできなかったらう。

だが、少女の闘いを称える者など居るはずがない。彼女は、結局我慢ができなかったのだから。下半身の全てと椅子と床を小便で濡らし尽くし、教室に小便の臭いを漂わせる少女の名は、俄かに騒がしくなった教室の中で、驚愕と嫌悪の色を含ませ、幾度となく響いていった——そして、自らの主を、親友を救えなかった少女にとっても、それは敗北の光景に違いなかった、

「お嬢様、言うまでもありませんが、私は使用人なのです」

トイレから出て、再び並んで歩き出した悠里が、意を決したように口を開く。

「そうかもしれないけど、私は親友だと、家族同然だと思っているのよ」

ストレートにぶつけられる好意に、意図せず頬が緩むのを感じたが、咎めるような口調を続けた。

「どちらにしても、私には何でも言っただいていいんですよ。隠し事はしないで下さい……その、我慢は、体に毒ですから……」

使用人の立場でも親友の立場でも伝え難い忠告を、悠里は口ごもりながらも言い切った。脳裏には、粗相の日から自室で一人塞ぎ込む恵理子の姿が、一人で持ち帰った二人分の卒業証書の重さが蘇る。

「あ、えっ、あつ、と……」

次に口ごもったのは恵理子だった。その顔色にさすのは、羞恥の赤色よりも、狼狼の青色の方が濃いぐらいいだ。

「……別に、大丈夫、だから」

そしてやはり、恵理子は頑なであった。

「それぐらいで、お嬢様が軽蔑されることなんてあり得ませんから」
悠里の方もまた、一度口火を切ってしまったのだから、どうにも引き下がることはできない様子である。

「そういう、問題じゃないの」

まだ口調は穏やかであったが、まだ柔和な表情を張り付けていたが、目は全く笑っていない。そこに、拒絶の色が浮かんでいるのは明らかで、悠里が気付かないはずはなかった。

「……今日だって、かなり我慢をされてましたよね。朝から一度も、していなかったですものね」

だが、悠里は踏み込んだ。それも、十五歳の少女の心の機微の真ん中に、真正面からである。

「……………」

沈黙は雄弁に恵理子の感情を語ってみせた。悠里の理性が、これ以上進むなと警告している。心臓が跳ねる。冷や汗が背を伝う。

「もしも、私が連れて行って差し上げなかつたら、どうなつていましたか」

お嬢様に嫌われたら生きてはいけない——そんな恐怖も悠里の中にはあったが、その思考はどこか冷静で、舌がよく回っていた。恵理子の、繕いのない生の心に触れることに高揚すらしていた。

「っ、あ……も、もう子供じゃないんだから、だ、大丈夫よ」

「大人なら、あんなになるまで、我慢はしません」

あまりに過ぎた言葉を、返す刀で投げ掛けてみせた。

「きちんと、恥ずかしがらずに言えるのが、大人なのは」

とはいえ、悠里は終始正論であった。聡明な恵理子が反論もできずに、口元をわななかせているのも、忠告が全くもって正しいからにほかならない。

「大勢の前で、粗相などしたら、どうするんですか」

そして、最後に吐いてみせた正論は、未だ傷跡の残る恵理子にはあまりに重い。

「っ……こんなところでそんな話しないで！」

恵理子が遂に声を荒らげる。往来の人々の注目を集める程度には怒気を含み、少なくとも悠里の熱くなり過ぎた心を冷ますには十分であった。

「も、申し訳、ありません、お嬢様、言葉が過ぎましたっ……」

悠里は恵理子の瞳が潤んでいるのを認めた。大切な人が二度と傷付かぬように願って放つ言葉だというのに、それで大切な人を傷付けた

ら本末転倒ではないか。

「……私こそ、怒鳴ったりしてごめんなさい」

「……あ、あのっ」

「車を呼んで頂戴。帰りましょう」

そしてそれきり恵理子は押し黙ってしまう。掛ける言葉を見つけることのできぬ悠里も、やはり口を開かず後を追うしかなかった。

傍から見れば非の打ちどころの無い令嬢といえど、欠点はある。例えば、平素は温厚ながらもどこか頑固なところがあるだとか。あるいは、朝に弱く目覚ましだけでは起きられないことも多いのでいつも使用人に起こしてもらっているだとか――

「ごめん悠里っ！　せっかく作ってもらったけど、今日は朝ご飯食べベている暇が無いのっ！」

――月曜日。朝七時ちょうど。普段ならば、従者が作ってくれる朝食を食べながら、優雅に紅茶を吸っている時分だが、今の恵理子は焦燥の最中にあった。

「分かりました。お車は先程手配したのですぐ着きます。恐らく、会議のお時間には間に合うかと」

お互いもう大人で、家に帰っても言い争いが続くことは無かった。けれど、お互いまだ子供で、会話もままならず夜を迎えてしまった。だから恵理子は、次の日が生徒会役員の大事な会議で、一時間早く起床せねばならぬことを言いそびれてしまった……それが昨日のこと。

そして運悪く、従者がいつも通りの時間に起こしに来るまでベッドの内でまどろんでいたのが今朝のことである。

「せめて、牛乳だけでも飲んでいかれたらどうでしょうか」

胃に何も入れないよりは、空腹が紛れるだろうという悠里の配慮であつた。

「ん、ありがとうっ」

結局、十五歳になつても目覚ましで起きられぬ自身が無遅刻を通せているのは、悠里のおかげであると実感する。一気に飲み干した牛乳が染み渡る。綺麗にアイロン掛けされて用意されたワイシャツと制服を身に纏い、恵理子は完璧なお嬢様へとなっていく。

(……帰ったら、昨日のこと、ちゃんと悠里に謝らなくちゃ)

焦燥しきった表情を、一瞬穏やかなものへ変えようと、最低限の身支度の済んだ恵理子は家を飛び出し、既にエンジンの掛かった自動車へと乗り込んでいった。

慌てて自宅を発った恵理子であつたが、学校に着く頃には、平素と変わらぬ優美な振る舞いを見せ、早朝からの会議も、定例の全校集会での簡単な演説もそつなくこなした。そんな恵理子の相貌に、再び焦燥の色が僅かながら混ざるようになったのは、ちょうど一時間目の授業が終盤に差し掛かった頃だつた。

(……次の休み時間に、済ませてしまふしかないかしら)

背筋を伸ばし行儀よく座り板書を映す恵理子が小さく身をよじる

と、静けさを保つ教室に、木製の椅子が軋む音が混ざる。誰にも気取られることのない微かな変化は、少女のその体の内で巻き起こる、秘めるべき生理現象を写し取っていた。

（お手洗い……まだ大丈夫だけど……今日は、昼休みまで持たせるのは難しそうね……）

登校まで寝坊をして時間の余裕など殆ど無かった。生徒会役員の会議は、予定よりも長引き終わるや否や全校集会の為に体育館に駆けねばならなかった。一時間目が始まるまでには僅かに空き時間があつたが、級友と他愛もない話をするうちにチャイムの音が鳴った——恵理子は、この日は慌てて飛び起きてから今に至るまで、一度もトイレに行っていないのだ。

最後に済ませたのは就寝前で、それからずっと恵理子の膀胱には熱い恥水が溜まり続けている。今この瞬間も例外でなく、自然の摂理に従つて、腹の奥に秘めた臓物が少しずつ膨らんでいつている。まだ危機とは呼べないが、欲求の全てを意識の外に置くことなどできなかった。

高貴たるべしという戒めが無ければ、密かに脚を揺すっていたかもしれない。もしも彼女が年端もいかぬ子供であつたら、ぎゅうぎゅうとスカートの真ん中を握っていたかもしれない。それぐらいに強く、無視などできない尿意がそこにある。

（まだしばらく大丈夫だと思ふけど……でも念の為……早いうちに済ませた方がよいものね）

数分の後、授業が終わり、恵理子と、同じ教室で授業を受けていた

悠里と、他の生徒達には平等に十分間の自由が与えられる。無論その間に教室を出て、用を足すということにも不思議はないはずだが、今誰よりもそうしたいはずの恵理子は動かない。

すぐに教室を出て行つては、まるで余裕が無いと言わんばかりだから。もしも誰かに行為を気取られれば、排泄の欲求に駆られて教室を飛び出していったと看過されかねないから。そんな憂慮が、淑女でなければならぬ恵理子の胸の内にはあつた。誰でもすることだからなどという言葉は、彼女の羞恥の心を少したりとも和らげることはないのだ。

とはいえそうは言つても、出るものは出る。どんなに貞淑に振舞おうと、どれだけ人の目を惹きつける相貌をしていようと、日々体の内の不浄たる老廃物を出さねばならない。恵理子は、ゆつくりと椅子を引いて立ち上がった。既に教室の中の多くの生徒がそうしているので目立つことはない。そして目指す場所——普段ならば昼休みに秘かに訪れている保健室の前のトイレ——への第一歩を踏み出していく。

「あ、御巫さん。ちょっと今大丈夫かな」

白色の陶器を望み、二歩目を踏み出さんとしたところで、出鼻を挫かれた。

控えめな口調で話しかけてくるのは、恵理子と同じ弦楽部に所属する少女であつた。同級生であるが、恵理子に強い憧れを抱き、慕っている中の一人だ。強い尊敬の念と生来の引つ込み思案が幸いして、同じクラスで同じ部活動ながら、なかなか恵理子に声を掛けられないことも多いが、周囲に人がいないのを見て、意を決したのだらう。

「今日の練習のことなんだけどもね——」

応答に窮するものではないが、かといつて短時間で切り上げられそうな話題ではない。もしかしたら、休み時間を全部使い切ってしまうかもしれない。机の周りに人の絶えぬ恵理子にとって、休み時間を級友達との会話に費やすことも珍しくはないとはいえ、今だけは止めて欲しかったというのが正直なところ。

(どうしよう……お手洗い、今のうちに済ませたかったのに……)

悠々と教室を抜け出し、慎重しく廊下を歩き、然るべき場所ですぐ汚物を存分に吐き出す。そして、排泄の様な想起すらできぬ高貴を纏つて教室に戻る。何の憂いもなくその後の時を過ごす……今ならまだ間に合う。この目の前の少女のたどたどしい言葉を遮ることさえできれば。

(……まだ、まだ大丈夫。あと一時間ぐらい、何てことはないもの)

恵理子はその場で話を聞き続けるしかなかった。決して、不安が無い訳ではない。むしろ、行けないと分かった途端に、これから迎え、排尿の欲求を抱えたまま過ごすことになる五十分間の授業が、異様に長いものに感じられてくる。

(全然、余裕だから……)

何てことないただの一言が言い出せない。誰にも知られたくはないという恥の心が、危機を避ける理性と、欲求を満たしたい本能をいつも裏切ってしまう——恵理子の脳裏を、昨日の従者の言葉がよぎった。

アナタの気持ち、ワタシの気持ち

軟球ころぶ

踏み台に乗って、上に手を伸ばす。

「んー、届かない。あとちょっとなんだけど……」

手は届くけれど触れるくらい、これじゃあ取り出せない。

「ねえ、ミッテ！ こっちに来て手伝ってよ」

私は入口の方を気にしている人に声をかける。

「あの、お嬢様そろそろお戻りになられては」

「また？ お母様なら夕方まで帰ってこないし、アナタが怖がつてる

メイド長だつてしばらくここには来ないってば」

安心したのか、諦めたのかようやくこちらに来てくれる。

踏み台を明け渡し、私より背が高い彼女に乗ってもらう。

「あの本を取ってほしいの。気になるわ」

ミッテは私が苦勞して取れなかった本をあつさり手に取る。

その呆気なさに多少の苛立ちも覚えるけど、彼女の手助けがなかつ

たらそもそもここに入れないから我慢する。

軽くホコリを払ってから、

「お嬢様、どうぞ」

と渡される。結構厚い本だけどなんだろう？ 開いてみるとすぐに

分かった。

「これ、アルバムだわ」

古ぼけてはいるけれど倉庫に放置されていたわりに、保存状態は良

くてちゃんと見れる。

それにしても、この写真の子どこかで……。

「んー、この子お嬢様に似てませんか？」

横で覗き込んでいたミッテに言われる。

「確かに似てるかも……でも私の写真にしては結構古い気がするし」

所々の情景は見たことがある。

しかし、なんだか雰囲気がいやなり古い感じがすると言っか。

「もしかして、これお母様のアルバム？」

私に似ていて、それでいて古いとなればそうだろう。

いつもは厳格なお母様は、どこか照れたようにどの写真にも笑顔で

写っている。

「なんだか逆に不気味ね……年月というものは。人をあまで変えて

しまったのね。残酷だわ」

私の言葉にくすつと零れた笑いの音。

「あー！ ミッテったら笑ったわね？ 私はともかくあなたはそ

れに同意しちゃまずいんじゃないの？」

ニヤニヤと彼女を責めると、

「な、なんのことです？ 気のせいでしょう。今私が笑っているよう

に見えますか？」

なんて、スンとすました顔でとぼけてしまふ。

追及するのも面白そうだが、今はそれよりもこのアルバムの方が

きつと面白いでしょ！

笑ったり泣いたり、お母様が普段見せない顔がここには記録され

ていた。アルバムをめくって、

「ん？ 何か変ね」

私はとあることに気付いた。

「どうしましたか？」

ミツテが改めて近づいてくる。

「ページには綺麗に写真が載ってるけど、たまに不自然にページに空白が空いてるのよ。ほら」

私が指す箇所は他とは違い、不自然に写真一枚分空いている。それが何ページか毎にぼつぼつと……。

写真をアルバムに載せた人がわざと空白にした？ いいえ、写真があったと思われる「跡」が残っている。つまりこれは、意図的な空白ではなく、

「誰かが写真を抜いた？ でもなんで？ なんの目的で？」

これは思わぬ収穫だ。お母様とメイド長にはこの倉庫にあまり近付かないよう言われていたけど、何か知られたくないようなものがあるらしい。

「これは気になるわね。ミツテ！ 他のもアルバムも見てみましょうよ！」

興奮する私に、

「いえ、お嬢様。倉庫に入ってから結構な時間が経ちました。そろそろ戻らないとさすがに気付かれてしまうのでは……」

なんて、気分が冷めてしまうようなことを言ってるのける。

「ええ？ アナタ何言ってるの？ お母様がいない今がチャンスだというのに、とんだ臆病者ね！」

ノリがいまいち悪い彼女に腹立ちながら、踏み台に足をかける。

「いいわ。私が自分で調べるからアナタは見張りでもしてて」

そう言い切ってはみたものの、やはりちょっと届かない。

「お嬢様、危ないですよ。別の本は次の時に私が取りますから今日はここまでということまで」

「もお！ 私は今知りたいの！」

思い切って台の上でジャンプ！ 届いた！ だけど、着地と同時にぐらあとバランスが崩れる。

「レニィ！ 危ない！」

咄嗟に彼女が私を支えるけれどそのまま地面に倒れこむ。

どすん！ 二人は倉庫の床に倒れこむ。

「いたた……あつ、ごめんなさいミツテ！ 大丈夫？」

「大丈夫ですよ。そちらこそお怪我はありませんか？」

彼女の上から避ける。私をかばって下敷きになったのだから、痛いわけなんてないのに。

「ほんとうにごめんなさい。軽率だったわ」

こは素直に悪かったことを認める。彼女が庇わなければ私が怪我をしていただろうし、そのせいで彼女があんなに汚れてしまつて。

「そんなに謝らないでください。私の方こそ謝るべきことが……」

彼女が何か言い出そうとしていた時だった。

ぎぎぎい……

不快で耳障りな音が入り口の方からして見るとドアがしまつていくところだった。

「あつ！ だめっ！」

ミツテが珍しく畏まつていない言葉を出していたけど、それを気にするより前にドアは完全に閉まつた。

身体を少し起こして、咄嗟に手だけを伸ばしてドアが閉まるのを止めようとしたけれどその距離なら無理だね。

彼女はしばらく固まっていた。

しかし、すぐに立ち上がるとドアに向かっていき、ドアを押したり引いたりしている。それなのにドアは全く開く気配が見えない。

「ミッテ……。あまり聞きたくないんだけどもしかしてそのドア、開かない？」

私が恐る恐る聞くと

「はい……ここはドアの立て付けが悪くて一度締めると中からは開けられないんです。外からなら簡単に開くのですが……」

もしかしてお母様やメイド長がここに近付くなど言うのは、こうやって閉じ込められてしまうかもしれないから、警告を促していただけでは？ 今更になってそんな考えが浮かんできた。

「でも、急に閉まったのはどうしてかしら。さっきまで普通に開いていたのに」

私はミッテの傍に寄る。

「きつと先程の振動でしょう。一応開いたままでドアを止めていたのですが、お嬢様と倒れた時にそれが緩んでしまったとしか」

ああ、それも私が原因なのか。

「えーっと……ごめんなさい？」

もはやどれから謝るべきか分からない。

「お嬢様が謝ってもどうしようありませんよ。今はココから出る方法を考えましょう」

確かに、彼女の言う通りだ。

起こってしまった事にいつまでも追及するよりも、起こった事をいかに収めるか、それが大事。お母様が帰って来るまでまだ時間はある。それまでに何とか倉庫から出て、何も知らない顔をしなければならぬ。私の我儘でメイドと一緒に入ってはいけない倉庫に閉じ込められました、なんてどれだけ怒られるか。

私が想像する恐ろしさに身震いするよりも先に何故かミッテがぶるるっと震える。ああそうか、彼女もメイド長から怒られることを恐れているのよね、私達は同じなんだわ。

ドアはどうやっても開かないから、他に切れそうな場所はないか探して歩いたけれど、窓も無いし床下があるわけでもない。入っている物で使えるような物もない。

疲れたし、やる気も無くなってきた。私は踏み台に座って休む。

「アルバムもそうだったけど、出てくる物見てるとこつてお母様の使わない物を入れてたのね」

積み木や絵本、おまるまで出てきた。お母様は厳しい人だけど、今のお母様が出来るまでの話は全然聞いたことがない。

知ってるのは昔からここで働いてるメイド長くらいかな。

「もう怒られるのは決まってるから、諦めて時間潰しましょう」

私が提案しても、

「諦めるのは早いですよ。まだ時間はありますから」

そう言ってミッテはうろうろと倉庫内を歩き回る。彼女は諦めずにちゃんとしているなあとと思う。

私ははと言っこの後怒られるのが嫌だなとしか考えていなかった。

すっかり諦めた私はアルバム捲る。抜けている箇所は気になるけど、小さい頃のお母様を見るのは面白い。今と違って顔いっぱい笑うお母様は見ているこちらにも楽しい気持ちになる。

「今もこれくらい笑えばいいのに……ん？」

写真の一つにメイド服の小さな子が写っている。お母様に負けないくらいの笑顔で仲良く並んでいる。

「ねえミッテ、もしかしてお母様の隣にいるこの子ってさあ」

「お嬢様どうかし……あつ！ メイド長ですか！」

彼女も気が付いたようだ。お母様以上に無表情の人が、写真では別人のように顔を輝かせている。

お母様は滅多に表情を崩さないが、メイド長はもはやロボットなのではと疑ってしまうほど笑ったりすることはない。でも、やつぱりちゃんとこんな時期があつたのね。

「ほら、これなんかお母様が笑ってピースしてるのに、奥ではメイド長が誰に怒られて泣いてるわ」

「ほんとですねえ。先代のメイド長でしょうか。それにしても何をしたらこんなに怒られ……フッフ」

私は微かに彼女の口から零れた息を聞き逃さない。

「またミッテ笑ったでしょ！」

「笑ってません。気のせいです」

ツンとした表情で私の疑いを跳ねのけようとするも、彼女の口がもによもによと動いている。私は先程彼女がうつかり笑ってしまった写真を彼女に突きつける。

ババツ！ 凄いい勢いで顔を反らしてしまった。私は回り込んで彼女

の顔を見ようとすると、バツ！ バツ！ と顔を見せてくれない。

「ずるいわよミッテ！ 絶対笑ってるでしょ！」

「わらつ、笑ってませえん！」

いつもより声高く否定する彼女の肩が震えている。

ふーっ、私は息を吐いて立ち止まる。

「分かったわ。私の気のせいだったみたいね」

諦めた私の言葉によりやく彼女がこちらに向き直る。

「ご理解いただけましたか」

だが、彼女は私の顔の前にある写真をもろに見てしまう。

「アハハハッ！ あつ」

私もにんまりと笑顔でゆつくりと写真を顔から降ろしていく。

「ずるいわレニイ、油断させるなんて淑女のすることじゃない！」

「名前」

ふんふんと怒る彼女の口から懐かしい響きが聞こえた。

「名前、久しぶりに言ってくれたね。さつき私が倒れかけた時も言ってたけど、最近全然呼んでくれないから寂しかったわ」

はっ、と彼女が気付いた顔をする。

「すみませんお嬢様、馴れ馴れしく名前を呼んでしまい」

またいつものメイドモードに戻ってしまう。

小さい頃は私の後を『レニイレニイ』と跳ねるように追いかけてきて、そんな彼女と遊ぶのが好きだったのに。今ではすっかり主従関係が出来上がりつつあって、昔のように遊んだりはしてくれない。

だからこの倉庫に二人きりで過ごしていた時間は懐かしくてどこか嬉しかった。

でも、分かっている。彼女は屋敷に仕えている身として友達のように主人に近寄ってはいけないのだ。

『いつか彼女も、あのメイド長みたいに万年無表情の厳しい人みたいになっちゃうのかな』

笑う小さいお母様と泣いている小さいメイド長の写真を私はそつとアルバムに戻した。なんだか少し悲しかった。

スマホはGPSでバレないように部屋の中、倉庫には時計が無い。だから今どれくらい時間が経ったのか全然分からない。

それでも時間が過ぎて困ったことが一つ。

倉庫に入る前は全然行きたい気分じゃなかったし、少し探し物をしたらすぐ出るつもりだったから倉庫に長居してしまうのは不本意だった。一度ソレに気付くとだんだんと膨れ上がってしまう。

最初は何となく誤魔化していたけれど、座っていても落ち着かないくらいお腹の下あたりが膨らんでいく。倉庫にお手洗いなんかあるわけ無いのは分かっている。分かっているけど求めてしまう。

もう怒られてもいい。

早く倉庫から出してもらわないと、このままだと私ここで……ここぞ？ いえ、違うわ。何もしない！ 何もしない！

そうやって弱気になる自分を何度も奮い立たせ、まだ我慢しろと言い聞かせてきた。けれど時間は過ぎるし水はどんどん量を増していく。

寒くもないのに鳥肌がたち、身体をふるっ！ と震わせてしまう。そんな私を見て、

「お嬢様……失礼ですが、お手洗いを我慢していますか？」

ミツテが本当に申し訳なさそうに聞いてくる。

「え？ な、何言っているのかしら？ 私全然そんなことなんてありません——」

そこまで言ったところでまた水が増えて私の体を震わせる。

だんだん大きくなっていく『お手洗いにいきたい』という気持ち。

私は無言でお腹辺りを擦って気を紛らわそうとする。

「お手洗いい、行きたいのですね？」

彼女は私に再度確認する。それを肯定するのは容易い。でも、その考えを口にするのはとても勇気がいる。

というか普通に恥ずかしい。例え同性相手でも、小さい頃から暮らしてきた仲でも、だって私はお嬢様とかそういう以前に女の子だから言ってしまうばソレを相手にも認知させてしまうから。

でも、私はじつとこちらを伺うミツテに、

「うん……お手洗いい行きたい」

そう告げてしまうのだった。

告白したところで私の水位が下がるわけでもなし、彼女が私の心配をもっとするだけだ。

「困りましたね……出られないのは変わりませんし、かと言ってここにお手洗いはありませんし……」

神妙な顔でミツテがうろろろする。

確かに私が我慢していることが分かって、彼女は焦っている。だけど、それにしても焦り過ぎじゃないか？

なんだかやけにソワソワしてるし、これって……。

「あのさ、ミツテもお手洗いききたかったりする？」

私の問いかけに、彼女は目を見開いてこちらを見る。もうその反応だけで分かってしまった。見る見る顔が赤くなっていく。アワアワと何かを言おうとしているようだけれど、全然言葉が出てこない。

ほんの数秒だけれど彼女はいろいろと葛藤し、

「はい、私もあの……お手洗いを我慢しています」

そうやって告白すると俯いてしまうのだった。

しょうがないことだ。閉じ込められてから結構時間が経つし、私が尿意を感じているのだから彼女だって同じはず。

それにしても困った。

おしっこを我慢する人が二人、開かない倉庫に閉じ込められて、いつ来るか分からない助けを待つにはあまり時間がない。お母様かメイド長でもいいから、こここの近くを通らないかしら。

ミツテは先程からゴソゴソと倉庫内を探っている。いくら探しても出入り口はその閉まっている扉しかないのに。

もういい加減諦めたら？ と声をかけようとして、

「お嬢様、これはあくまで緊急的な提案なのですが、もしも我慢出来なくなってしまう場合、こちらを使うのはいかがでしようか」

そう言っただけで彼女がおずおずと差し出したのは、

「それおまるじゃない!!」

おそらくお母様が幼少期に使っていたであろう品。それをよりにもよってトイレ代わりに使えと言う。

今度は私の顔が赤くなっていく番だ。

おまると彼女を交互に指差しながら、

「あなつ、あなた私を侮辱しているの? 私はもうトイレでちゃんと出来る歳なのよ? おしめもとうに卒業しているのにそんなのを使えって言っの?」

なんて思わず大きな声で言ってしまう。

もちろん彼女には私を侮辱するつもりなんてないだろう。『もしも』の話をしているだけにすぎない。

最悪の結末になるよりは幾分マシ、そういう提案。

でも、この歳になってあんなのにするなんて……。

私の怒り（というより恥ずかしいだけ）の声を浴びながら、彼女はじつと俯いて耐える。責めた所で仕方がないし、そもそも閉じ込められたのもここに内緒で行こうと誘ったのも私が原因。

それを言わずに、自分も我慢しているというのに私に用を足せる物を差し出してくれている。そのことに気が付いてだんだん私は頭が冷めていく。私に彼女を責めることが出来る権利は無い。

また私だけ先走ってしまった。

「ごめんなさいミツテ。言い過ぎたわ」

私の謝罪でようやく彼女は顔をあげる。

「そんな! お嬢様の気持ちは十分理解しております。確かにコレを使うのは些か抵抗がありますから……」

そう言っただけで彼女も自分が床に置いたおまるを一瞥する。やっぱりそうよね、恥ずかしいことは当然分かってる。

でもどうしようもない時の選択肢は一つでもあった方がいい。床にしてみました、服を着たままなんかよりはずっと……。

れない状況に追い込まれてきているというのに！

そう考えているとなんだか体内のソレが暴れ出しそうで、「で、でもっ！ もし私がこれを使ったらミツテは使えないじゃない！ あなたはどうするの？」

いけない誘惑を否定するように、辛うじて思いついた疑問を口にする。おまると言うのは子供が使えたとしてせいぜい2回、それを私くらいの子が仮に使ったでしょう。

そうするとどうなるか。溜めている量にもよるかもしれないけれど、やはり使えて一回くらいの容量しかないはず。二人分はとも入るとは思えない。

では彼女はどうするのか？

私がスツキリした後でひたすら助けが来るのを待つのか？

でもずっと誰も来なかった時は？ 倉庫が汚れることになるのだろうか。

私の心配を予想していたように、彼女は微笑みながら物陰から何かを取り出す。

「大丈夫です。私にはこちらがありますから」

彼女が持っているのは小さなバケツ。

これもお母様が玩具として使っていたのもだろうか。おまると比べて、出せる量としては全然足りなそう。でも、少しでも出せたら残りを我慢出来る時間を延ばすことは可能なのかもしれない。

「なるほどね、なら大丈夫ね」

納得したように私は言うけれど、何を言っているんだと自分で自分を叱りたい。全然大丈夫な状況じゃない！

トイレじゃない場所、トイレじゃない物で用を足すしかないかもし

さよ様のおしっこ事情

にゃこ

冬は好きな季節。

この季節、春を待ち望む人は多いかもしれないけれど、わたしは冬のキーンと静まり返った空気が好き。しんとした部屋で、お気に入り本のページを繰るのが大好き。

わたしの場合なのだけど、本を読んでいる間は、登場する人物の像が頭の中に浮かび上がってきて、セリフはちゃんと喋るし、会話シーンも映画を見ているかのように流れていく。

自分の中では、この人物はこんな服を着てこんな性格で……、と想像しながら読むから、あまりその辺りを詳しく書かれると、自分の中で結像した人物のイメージが崩される気がして。どちらかというと、その辺りの事は想像にお任せしてくれる作者が好きかな。もともと、本筋が面白ければ、細かな設定など気にならなくなって、お話に没頭してしまうのだけど。

いい本に出会えた時は、それはもう時間を忘れて入れ込んでしまつて、何度もご飯に呼ばれているのに気づかなかつたり、我に返つた時に滅茶苦茶におトイレに行きたくて、身震いしてしまうくらいになったり、そういう事は今までに何度もあるわ。物語が佳境に差しかっている時は、行きたいのを我慢しながら読む事もたびたびあるの。だって先が知りたくてウズウズしてしまうじゃない。それに、そんな頻繁におトイレに立つ事は、淑女としての振る舞いではないと思うの。

うちで雇っているメイドさんも、よくよく考えるとおトイレを使っているのを見たことのない人がいるわ。

使用人用のおトイレがある程の豪邸でもないし、現場を目撃する事があってもいいと思うのだけど、その人はただの一回も、おトイレを使っている場面には出くわさないの。一体どんな膀胱を持っているのかしらね。

わたし、そのメイドさんに変な対抗心を持っていて、彼女がおトイレに行く姿を見せないなら、わたしも見せる訳にはいけない、プライドが許さないという気持ちになってしまっているの。

もしかして、お互いにおトイレに行かない事を不思議に思っているのかもしれないわね。

その無駄なライバル意識があだとなつて、ちよつとしたアクションを起こしてしまう訳だけど。

……ああ、自己紹介がまだだったわね。わたしの名前は西野さよ。一二歳。来月には中学の受験を控えている小学生。

志望校は中高一貫教育の名門で、狭き門と言われているの。

小学生だからって馬鹿にしないでよね。し、身長だってもう一四六センチはあるわ！

何？ 小さくて可愛い？ ば、馬鹿にしないでよね！ 早生まれだから仕方がないでしょ！

コホン、話を戻しましょう。わたしについてのお話をもう少し聞いてくださるかしら。

創業家として代々経営していた会社が、お祖父さんの代で興した事

業で大成功し、成り上がった資産家の一人娘がわたしなの。

でもそれを鼻にかけるような事をしてはならない、という家訓が家にはあって、人と会話する時は、その人の立ち位置をよく見極めて、相手の視点の高さに合わせて話すようにと、厳しく躰けられてきたわ。そんな事は言われるまでもなくて、私は誰々はどうだから、などといった先入観を持つ事なく、クラスメイトをはじめ、様々な人と接してきたつもりよ。

わたし、ちよつと子供らしくない言葉遣いかもしれないわね。同級生とお話する時はこんな風ではないのよ。もつと普通で愛嬌のあるしゃべり方だってできる。あなた、大人でしょ？ だから私も淑やかな言葉を選んで話しているつもり。子供だからと甘えるつもりはないわ。

小学校は、お受験で入学したところではなく、公立なのだけれど、そこでの学童生活もうまくいっていると思っているのよ。

美樹ちゃんに静ちゃん、真歩ちゃん……。お友達にも恵まれているし、充実していると思う。皆いい子ばかりだし、この学校で学べて本当によかったと思っているわ。

……紹介ついでに、ちよつと悩みがあることも言っておくわね。

学校では学業、交友関係ともに、とても充実しているのだけど、わたしにはコンプレックスがあるの。それは、おしっこ……、失礼、おトイレが近いということ……。

みんなが楽しそうに授業の間の休憩時間を過ごしている時、私はお

トイレに行きたくて気もそぞろ、という事が日常茶飯事なの。誰か誘ってくれないかしらと思いつながら、身体を揺らしたり、脚を組み替えたりするような、落着きのない様子を気づかれる事のないよう、あくまでも澄ました表情を作って、いつも声がかかるのを待っているの。私にも高貴とは言えないにしろ、資産家の娘としての自負があるから、自分から言い出すことがはばかられてしまつて。

生理現象と言つても、授業が終わるたびに行きたくなる、などという事、明かせる訳がないじゃない。お友達にも授業の合間合間におトイレに向かう、なんて子はいないのよ。

膀胱が発育不足なのかもしれないわね。さつきも言ったように早生まれだし、身長も高いほうだとは言えないと思うから。

本当の限界に近くなり、その……、おちびりをする事がとても多いの。わたし今とても恥ずかしい告白をしているわね……。

授業中や、次の授業までの休憩時間など、もう常におしっこがしたいという感じだから、出口が疲れてしまつて、油断しているとすぐにシヨロロ……、と出てしまうのよ。

匂いが周囲に漏れていないか、とても心配になるの。おトイレで下着の濡れ具合を確認する時は、大抵、ツーンとした匂いがしているのが分かつてしまうもの。

でも、おしっこを我慢できないこと、おちびりを頻繁にしてしまうこと、……あ、あそこからおしっここの匂いを漂わせてしまっていること……。これらはわたしに劣等感を抱かせるのだけど、その反面、そんな自分をかわいいと思つてしまうところもあるの。

わたしもわたしの膀胱も、いつも一生懸命に我慢をがんばっている。まだ大人じゃないものの、ちよつとくらい失敗はするのよ。そう自分をなぐさめているうちに、なんか愛おしくなってしまうて。

我慢しがちになってしまうのも、悪くはないかなと最近では思うようになったわ。

実はいまも、本当は少ししたい……。

コンコン、とドアがノックされる音が聞こえてきた。

「さよう様？　いらつしやいますか？」

あ、リリーだわ。

リリーはこの家で雇っているメイドさんよ。確か一九歳だったと思う。

生まれはフィリピンで、日本に留学に来ている大学生。お父さんが日本人、お母さんがフィリピン人のハーフなのだとか。だから日本語と英語を使いこなせるし、学校の成績もかなりいいみたいなの。

彼女は家庭では日本語を使うようにしつけられてきたようで、訛りはおろか淀みもない美しい日本語を使いこなしているわ。尊敬語や謙譲語、丁寧語まで、流ちょうのように使い分けているのは、ちよつと感心してしまふわね。

……ごめんなさい。リリーが来る前に、お……、おしっこ、しておくべきだったわね……。着ているワンピースの上から下腹部の膨らみに、ギュッと握った手を添えると、少しは気が紛れるかしら。

ところで、メイドにはステイインと言われる住み込みタイプと、ス

テアアウトと言われる通いタイプの、二種類の働き方があるのだけれど、彼女はステアアウトのメイドなの。

平日は大学でお勉強をして、土日で学校がお休みの時はこうやって我が家の家事を手伝ったり、私の家庭教師をしてきているの。

日本人は、フィリピンではメイドさんを雇う事は結構普通の事で、リリーの家でもベビーシッターとして、家事の手助け役として、メイドさんを雇っていたみたい。だから、リリーはメイドの本分とでも言えいいのか、仕事内容がどういうものなのか、よく理解していたみたいで飲み込みが早く、わたしの両親も感心していたわ。

リリーが私の部屋を訪れたのは、今から家庭教師のお仕事をするためよ。受験のお勉強の時間が始まるの。

下腹からはかなり沢山溜められたおしっこを外に出してしまいたい、という信号がツーンときているわ……。果たして我慢し続けられるのかしら……。

ああ返事をしないとだめね……。リリーを待たせてしまっている。「ど、どうぞ？　開いているわ」

「失礼いたします、さよう様」

隙の無い作法でドアを開いたリリーは、わたしに軽く会釈してから、室内に入ってきたわ。小脇にレッスン用のテキストを抱えて。

彼女は古風なメイド服を上品に着こなしている。この家のメイドさんの制服なの。古風と言っても仕事のしやすさを追求したつくりになっでいて、ところどころにあしらったフリルも控えめに見えるかもしれないわね。髪は一つにまとめていて、白のカチューシャが可愛ら

しいなと思う。

ああ……それにしても、この尿意、今日は危険な予感がするわ。少しでも気を緩めると、滲みだしてきそうなもの。

* * *

——お嬢様、お手洗いはどうなさっているのだろう……。

私はいつも不思議に思う。

もうすぐ中学生になられると言っても、まだお嬢様は小学生。年端もいかない子供が、こんなに長い時間澄ました顔をして、お手洗いにいきたい気持ちを我慢していられるものなのだろうか。

私はステインのメイドではないから、お嬢様のお過ごしになっている姿を四六時中見ている訳ではない。だけど、家庭教師をしている間はかなりの時間を拘束する訳だし、行きたいと仰られないのは不自然に感じる。

私がお屋敷で仰せつかっている主な仕事は、お嬢様にお勉強を教えて差し上げる事、それに衣服の洗い物を片付ける事だけど、洗濯物入れにいつも綺麗に畳まれて置かれているお嬢様の下着は、黄ばみがとても目立つし、脱がれて間もないと思われるものは、グジュグジュに湿っている事がほとんど。ちよつと微笑ましく思えてクスツとしてしまうのだけど……、お嬢様は言い出すのが恥ずかしくて黙っているのかな？

……私と同じなのかな？ 私自身も、メイドはお手洗いを使っている所を軽々しく見せてはいけない事だと思っていて、西野家では極力

使ってはいない。

我慢するのが当たり前。

いつしか私は、お嬢様の下着の汚れをチェックするのが癖になってしまっていたし、お嬢様がいつ、ギブアップしてお手洗いに駆け込む事になるのか、それを見るのを心待ちにしていた。

ちよつと意地悪かもしれないけど、お手洗いにいかない分、下着の汚れも、それに匂いもきつくなったりするので、後々それを確かめる時にちよつとドキドキしてしまう自分がいる。

今日は気のせいかな、お嬢様がいつもよりも落ち着きがない……。

もしかして、相当我慢されているのでは、と思う。

追い詰めすぎて、粗相をされるような事になるのは流石に心苦しいので、限界サインを見逃さないように、よく観察して差し上げないと——

* * *

——リリーは真面目なの。今日の予定は頭にしっかりと入っていて、時間に遅れるといった事はほばないと言つてもいいわ。

「さよ様、お勉強のお時間でございます。ご準備はよろしいですか？」

「ええ、今日もよろしくね、リリー」

はあ……、おしっこしたい。つま先をくねくねと動かしていないと落ち着かない感じがする。机の下だから多少動いてしまっても、彼女には分からないはず。

「はい。今日は社会の日ですね」

そうだった、社会は嫌い。ただただ出来事や、人物などをひたすら暗記する能力を試されているだけに思えてしまう。

社会が終わったら国語の勉強が残っている。読書を趣味にしているというのもあると思うのだけれど、国語は学校でのテストでもまず間違える事はないし、受験用のテキストを解いた手ごたえからも、充分に志望校に合格できるレベルだという自信は持っている。

「ええ……、苦手なのよね社会」

出口をキユウ……と締め付けて、内股になりながら、変な声が出ないように、細心の注意を払ってわたしは答えたわ。

「どこが苦手なのでしょう？」

リリーも、なんとかしてわたしを第一志望の学校に入学させてほしい、という両親の願いを叶えなければいけないのよね……。

両親のためにも、彼女のためにも。結局は自分のためなのだけれど、それは分かっているのだけだ。

「暗記、暗記、とにかく暗記。そういう機械的な勉強はわたしには向いていないと思うの」

わたしの言葉を聞いて、論すようにリリーが言う。

「社会は決して暗記科目ではないですよ、さよ様。色々な出来事がそれぞれつながりのあるもので、ジグソーパズルのように一つのピースが収まると、次々に世界が開けて明るくなっていく教科だと、私は思います。最初は覚える事が多いなどお思いでしょうが、パズルを解く楽しみに気づいたら、止まらなくなるほどに楽しいと私は思いますよ」

「そんなものなのかしらね。分かった。時間ももう残されていないし、

みっちり頼むわね」

「はい、さよ様。私にもできる事ですもの。さよ様にできないはずがありません」

しばらく社会の勉強を手とり足とり教えてもらった後で、実力を見るためにテストをしたの。いま、リリーが採点中だけれど、はつきり言って自信はない。国語、算数、理科はそれなりに自信はあるけど、社会だけは本当に苦手で。

それに、さつきよりも一段と主張が強くなってきた下腹部の鈍痛……。ああ……。早く出してしまいたい。

……。あ。ギリギリと出口を責めてくる液体が、今、少しだけ下着に染みこんでいった気がするわ……。

「はあ……。疲れたわ。模擬テスト、結果出た？ リリー」

リリーは冷静に採点結果と総評を話し出したわ。私の切ない欲求にはまるで気づいていないようだった。

「ええとですね。一〇〇点満点で四六点ですね。算数、理科、そして国語の点数を合わせて考えると、合格ラインだとは思いますが……。確実に、となるともう一声欲しいところですね」

「二月には受験でしょ、わたし、ちょっと不安だわ」

わたしは根を詰めて模試を解いていたせいで、体が硬くなっていたから、反射的に背筋を反らしてグーッと伸びをしたの。

おしっこをしたい時にやってはいけない動作なのに、ついやってし

まった……。

急に、おしっこがすぐしくたくなってしまつて……あ、と思つている間にジワア……と下着を濡らしてしまつたの。またちびつてしまつた……。

慌てて出口をぐつと締めて、うつむき加減でいたら、すぐくしたい、漏れてしまふ、という程の尿意ではなくなつたけれど、お腹の水袋の中身は全然減っていないから、ジンジンとした膀胱のむず痒い感覚がずっと続いてしまつていて。

リリーは微笑みを浮かべながら、わたしに問いかけてきたわ。

「さよ様、お疲れさまでした。次は国語のお時間ですけど、しばしお休みになれますか？ お茶を淹れて参りましょう」

わたしは、彼女の優しい問いかけにも生返事でしか返せない状態だったの……。

「そ、そうね、休憩にしましょう。根をつめすぎていけないもの」
ああ……おしっこしたい。早く出ていつて、リリー。

リリーに返す言葉も必要最小限になつてしまつてゐるのを自覚しているわ……。

だつて、少しでも気をゆるめると、本当に大変な事になつてしまひそう。

リリー……、はやく、はやくお茶を持つてきて頂戴……。

そうじゃないとわたし、おしっこ出せない。

「しばらくお待ちくださいませね、さよ様」
「ありがとう、リリー。ゆっくりらせていただくわ」

「それでは、失礼いたします、お嬢様」

リリーが上品に一礼をし、ドアの向こうに消えた瞬間から、わたしは身体をむずむずが止まらなくなつてしまつてゐたの。

膝丈のワンピースの中に手を入れて、下着の上から出口を直接押さえていたわ……。誰もいないから、余裕のないわたしをさらけ出してしまつてゐたの。出口を三本の指で押さえるだけではなく、円を描くように、グリグリと力を込めて揉み込む感じで……。もう本当に出てしまひそうだったから、そうでもしないとイケなかったの。

たまに、敏感な突起を擦るように指を動かしてしまつて、身体全体をビクン！ と震わせてしまつたり……。本当に誰もいない時だからこそ出来る、限界に達したときのおしっこ我慢しぐさ……。

はしたない事かもしれないけれど、仕方がなかったの。

下着はぐつしよりと濡れていて、これ以上濡らしてしまうとスカートの裏地だけではなくて、外から見ても分かつてしまひそう。

リリーが来る休日、わたしはどうしてもおトイレに立つ事ができないの。学校ではやむを得ず使うのだけれど、彼女の前ではどうしても言い出す事ができない……。

リリーはとても気が利く、有能なメイドだと思うのだけど、一つだけ心遣いの足りないなと思う点があるの。

そろそろおしっこがしたいのでは、というタイミングを見て、隙を見せてくれない、声がけしてくれない……。

生理現象なのだから素直になればいいのに……、そう思う気持ち、彼女の前では萎んでしまつて、どうしても言えないの。

わたし、彼女がおトイレを使っているところを見たことがないの。いつたい何時、おしっこをしているのだろう……。

リリーがおしっこをずっと我慢できているというのに、リリーをメイドとして雇っている家の一人娘がおしっこを我慢できなくて、行ってきてもいいかと訊くなんて……私には無理だったの。

少しでも動くと二氣に出てしまいそうだけど、動かない事にはこの状況をなんとかする事はできない。

勉強机から立ち上がると、更に尿意が高まる。内股になって足踏みしながら今来ている大波をやりすごそうとする。

出口がヒクヒクと脈打つのを感ずる。あ、だめえ……！ おしっこ、ま、まだでちゃう！

ジョオッ……、と新しい温もりが股間に広がっていく。時間にして一、二秒くらいだろうか……。出口を締める事ができず、かなりの量をちびってしまった。

もう無理っ……おしっこ出すっ………！

わたしは両脚を絡ませるように歩いて、堪えきれないおしっこを内股に伝わせながら、クローゼットに近づき、ドアを開けたわ。

そして暗がりには手を伸ばし、目的の物を手にしたの。

それは空っぽになったペットボトル。

それに一〇〇均一のお店でこっそり買ったキッチン用の漏斗。

あっあっ……もうだめ……漏れちゃう………！

ああ………！ で、でるっ………！

急いで蓋を開けてボトルに漏斗を差し込み、下着をずらす。

チヨロロロ……

シヨロツ……

ジョッ、ジョロロロロロロ………

はああ………。

出てる……きもちいいわ……。

わたしペットボトルにおしっこしてる……。リリーがすぐに戻ってくるかもしれない……。でも止まらないの……。

小さい漏斗だから、力を加減しないとすぐに溢れそうになってしまわ……。

締まっている出口を、もう全開にして出してしまいたい、そう体は訴えてくるけれど、それは我慢……。くう……。切ないわ。

お腹の筋肉に勝手に力が入り、一氣におしっこを押したそうとするわたしの身体。

油断するとコントロールできなくなりそう……。

ジョオオオオオオオオオオオ……

トポポポポポ………

淡い小麦色のおしっこがペットボトルに注ぎ込まれていくのを恍惚として眺める。

ペットボトルには、ジャスミン茶が入っていた事を示すラベルが貼

られている。

ああ……これにしてよかったわあ……。

ジャスミン茶とそっくり同じ色だもの。

ボトルの三分の一ほどをおしっこで占めた時、廊下を歩いてくる足音を聞く。

あつりりーだわ！ も、もう戻ってくるなんて……！

と、止めなきゃ！ ……おしっこ止まってえ!!

わたしは出口をギュー！ としめつけ、出続けていたおしっこを無理やり止め、下着を元に戻そうとする。完全には勢いが弱まっていないう状態だったため、下着が間に合わず、数滴のおしっこが床に敷かれたカーペットに落ち、染み込んでいく。

あそこを拭いている時間はないし、第一、もうおしっこでジュークになった下着を穿いているのだから、拭く意味もない。

急いでペットボトルの蓋をしめ、漏斗と一緒にクロゼットにしまひ込む。

コンコン、と軽やかな音のノック。

「失礼します、さよ様」

「あ、ありがとうりりー、今ドアを開けるわ」

トレイに紅茶を入れたボット、それにお菓子をおせて、りりーが部屋の中に入ってくる。

「……どうかなさいましたか？ さよ様。なんだか慌てていらつしやるような……」

《お嬢様》にあるまじき行為をしてしまったわたしは、うまくその場と取り繕う事に失敗していたようだわ……。

出していたおしっこを急にとめてしまつて、膀胱から出続けようとしているそれを抑える事に神経を使わなければならず、どうしてもここにあらず、といった風な返答になつてしまう。

「う、ううん、なんでもないわ。お茶の時間にしましょう、りりー」

「……はい、さよ様」

自分でしたおしっこ、ジャスミン茶と間違えて飲んだりしないように、注意しなければ……。机の上に自分のおしっこが入ったペットボトルを置いたまま、本を読み耽るわたしを想像してみると、りりーの前だというのに、ちよつと楽しくなつたわ。楽しくなると同時に、さつき出しきれなかったおしっこをちびりそうになる。くう……、油断しているとだめね……、お勉強が終わるまでは、あまり考えないようにしないと。

りりーの淹れてくれた紅茶はとても香り高く、お茶請けに用意されたバウムクーヘンがよく合った。余裕をもつて味わう事ができないのがもつたないわ……。

おしっこがしたい時に背筋をきちんと伸ばしていると、出口にうまく力が入らないし、飲み物を飲もうとすると、どうしても出口が緩んでしまう。不思議だけれど、身体づくりがそうになっているの。わかるでしょ？

膀胱は収縮しようとする動きを止めようとはしてくれなくて、熱い紅茶を口に運ぶたびにジワリ……と下着を濡らす。もうスカートの裏地までしっとりしている感覚がある。この後、まだ国語のレッスンを受けなければいけないのに、わたしは耐えられるのかしら……。

「そういえば、さよ様は私の生まれた国の事をもっと知りたいとおっしゃっていましたね」

確かにそう話した事はあったけれど、今はおしこの事で頭がいっぱいで……。

「ええ、知りたいわ。身近に異国を知っている人と、いろんな事を聞きたいと思うの」

余裕がないというのに、わたしの口は本当に素直じゃない。

「フィリピンの、その……お手洗いなんですけど……、ああ失礼しましたさよ様、こういうお話はちょっとお茶の時間にするものではないですね」

興味はなくてもない話題……。

「いいわ、話して頂戴」

本当は身体を揺らして強い尿意を散らしたいのだけど、そんなはしたない事できない。おトイレに行きたいとも言えない。

はあ……んっ。もう本当にだめなお……！

「将来ご旅行される時には有用な知識だと思いますし……」

リリーも気づいてもいいようなものだわ。わたしがあなたと居る時に一度でもおトイレに行きたいと言った事があった!?

何もしなくても自然に溜まる液体。それにお茶だって飲んでいるわ。

それをわたしはどうやっておトイレにもいかず、今までごまかし続けてきたか……。

「日本とフィリピン、何が違うのかしら……?」

「インターネットでお調べになると分かるとは思いますが……。まず洋式のお手洗いは便座がついていないのです」

リリーはゆつたりした、どこか大人の余裕を感じる言葉遣いで説明する。彼女にもメイドとしての作法があるのだらう、ゆつくりと囁んで含めるように、それでいて淀みなく明瞭に。焦っている今のわたしにとっては、落着いた態度の彼女がうらめしかった。

「え……? じゃあどうやって済ませばいいの?」

我慢している時におトイレの話題は辛い。気持ちよく放出している自分をつい頭の中に思い描いてしまう。

キュウウウ……。お腹の中の水風船が縮みたくて仕方がないみたい。

「現地の人は、便器の上に乗って済ましています。ですから、お手洗いに腰掛けるといのは、不衛生なので絶対にやってはいけないことです」

「そうなのね……。便器の上に乗るって、洋式トイレを和式トイレのように使うって事よね? 想像するとんだか恥ずかしいわね」

ああ……。どんな姿勢だっていいから、今のこのむず痒いような、鈍い痛みを感じるような切なさから開放されたい。

便器に両足を乗せ、高いところから思うがままにする、出してしまおうおしこは、とても気持ちよさそう。んっ、だめえ……。イメージしたらだめえ!! あっ……。またちびっちゃった……。

「日本のお手洗いを使うようになって、私もそれは感じています……。

日本人はこう、中腰になって済ます人が多いですね」

リリーは空気椅子に座っているように身振りをまじえて教えてくれたわ。

「その姿勢も、慣れないとうまくいか自信がないわ……。お……、お小水はいいとしても……」

「私もそう思います。現地の人やり方に合わせたほうがいいのかもしれませんがね。抵抗があるのも最初だけです」

涼やかな笑顔を浮かべるリリー。

いつも安らぎを与えてくれる、柔らかな笑顔が、小憎らしく感じてしまう。わたしはこんなにおしっこしたいのに、リリーは……。

「きれいなお手洗いでも、やっぱり便座がついていないので、ご旅行の際には自宅で練習してからのほうがいいかもしれませんね」

「そうね、抵抗があるけれど、世界には色んなところがあるでしょうから、生理現象の処理については予習が必要ね、助かるわ」

せっかくだから、今お腹にあるおしっこで練習してみようかしら……。つて、そういう事を考えるから駄目え……。も、もれちゃう。

リリーは続ける。

「それと、フイリピンのお手洗いは紙を流せるようには作られていないので、それにも注意が必要です」

「え……そ、それじゃ、拭いた後の紙はどうしたらいいの？」

「専用のゴミ箱が用意されているので、そこに捨てるのです。さよ様がお泊りになりそうな、高級なホテルでもそれは共通で、基本的には流してはいけませんから、忘れないようにしてくださいね」

「……分かったわ。そ、そろそろお勉強の方を再開しましょう」

「はい、さよ様」

色々訊きたい事があつたけれど、そうそうに切り上げてお勉強の間を終わらせないと、大変な事になってしまう。……。もう裏地だけではなくて、外にまで滲み出ている感じがする。椅子の布もおしっこの染みで丸く黒ずんでいそうだわ……。

国語のレッスン。

……レッスンと言っても、元々得意な教科だから、リリーの助けがなくても自分でなんとでもなるとは思うの。社会がご覧の通りの有様だから、自信を取り戻すのに必要な儀式とでも言えはいいのかしらね。でも、出題されている文章を黙々と読み、回答を記入していくのだけど、書いてある事が頭にはいつてこない。おしっこが今にも出てきてしまいそうで、全く集中できない。

おしっこしたいもう出ちゃう。も、もう駄目かもしれない……。助けて……。あつ。

ジョツ……………シヨワアア……………

ううっ……………もう無理だわ……………！

不運な彼女と幸運でもない私

ゆつきゆん

手前味噌というか何と言うか、私のメイドはとても美人だ。

ツンと通った鼻筋、大きくて切れ長な眼、薄い唇、小さな顔。背中まで伸びたきらめくような銀髪に、小さな頃からずっと憧れていた。背も高いし足も長い。それに、私を抱きかかえる力がありながら手足は細く、日焼けを知らない肌をしている。

「ん……はあ……よし、四時半、オッケー」

小学校高学年で普通の家にメイドはいないと知り、中学校でみんなが離れて行った時も、こんなに綺麗なメイドがいるのだから仕方ないとさえ思っていた。私が特別なのはもうどうしようもないし、じゃあこの優しいメイドがいればもういいかな、なんて、後から知ったけれど、恋にも似た気持ちを抱いてすらいた。今もまあ、最悪一人で暮らしていければと思っているけど。

とにかく、わたしは自分のメイドを愛している。だから、彼女のことなら何でも知りたいと思っているし、私が知らない彼女を知っている人に胸を痛めたりもする。高校に入ってから少し自分でも落ち着いたと思っていたのだけど、日に日に気持ちはざわざわするばかり。最近私に倒錯していることに気付いてきたけど、もう止められないことも悟ってしまった。だって、こんなこと正気じゃできるはずもないから。

日も昇っていない午前四時、私は目覚ましも無く目を覚ました。一

応シーツを確認。濡れてない。良かった。この時間に起きるために、夜中コーヒーをがぶ飲みしたんだから。ちよつとお腹が重いくらいトイレに行きたいけどまあいいや。どうせこの後トイレに行くんだし。静かに部屋を抜け出し、階段を下りて廊下の端、一階のトイレへ。広いお屋敷にある三つのトイレの一つに入り、鍵をかける。中の装飾も無く、ドアもどこか屋敷の内装に比べて貧相な印象を受ける。ここはお屋敷の使用人トイレ。今はお母様が旅行に出दैてお付きもついていつているから、実質的に専用トイレになっている。ここにどうして私がいるのかというと。

しゅいいいいーっ……ちよろろろっ……

「はあ……」

夜中で溜まりに溜まったものを済ませる。ちよつと飲み過ぎたかもしれない。おねしょしたら元も子もないし、間に合ってよかった。

ただ、朝の用を済ませているのはおまけ。本当は、そろそろここに来るだろう最愛のメイドを邪魔してやるため。彼女の痴態……とまでは言わないけど、可愛い姿を見るため、今日、私は自分のメイドのトイレを禁止して、あわよくば。

きっかけは簡単で小さなことだった。二週間前、私も理由は知らないけれど、お母様が食事の席で話したちよつとしたエピソードだった。まだ私が小さかったとき、渋滞に捕まった彼女が、我慢できず車の中で粗相をしてしまったと。すぐに遮られてしまったし、お母様も酔っていたというのもあってそれ以上の話は解らなかったけど、その夜、ベッドの中で私は床を蹴っていた。

私の知る彼女は、いつもクールで淑やかで。私が無理難題を言った

としても、少し微笑んで論してくれるような姉のようなそんざいだっただのに。昔のこととはいえ、私が知らない彼女の一面があるなんて理由はどうあれ、それを許せない心の狭い私がいいた。

カラカラカラ……

後始末を済ませて水を流し、それでも出ない。ここで、彼女が起きて朝一番に来るのを待つ。彼女は私の前では決してトイレに立たないから、朝起きてここに来るだろう彼女さえ止めてしまえば。それで彼女は一日トイレには行けなくなる。

「……はあ」

こんなことをしてしまった自分に対して、少し良心が痛まないこともない。でも、それでもどうしても見たい。今まで笑顔と、咎めるときに真剣な顔、仕事中の物憂げで儂げな表情しか見たことが無い彼女でも、尿意に顔を歪めることがあるんだろうか、なんて。

今ならまだ間に合う、と思いつつ、それでも出る気にはなれない。背中側の柵にある小さな時計を見る。そろそろ来るはずだ。

——ガチャッ

「……お嬢様？」

「……おはよう、くれは？」

彼女が来た。涼やかで凛とした、透き通るようによく通る鈴のような声が、私専属のメイド、くれは。苗字は本当のところは解らないけど、とりあえず私と同じ有馬。まさか私が入っているとは思わなかっただろうから、ノックもせずにドアノブが回った。これだけでもレアなものが見られたな。少し満たされた心持ちで、訝し気な声に平静を装って返す。ごめんね、くれは。今日は辛いと思うけど、頑張ってるね。

こんな私のためにだけ。

「寝ぼけて階段を下りるなんてことがありますか、お嬢様。お体に障りますからよく寝ていてください」

「実際あつたんだからしょうがないじゃない。私だってちゃんと二階のお手洗いだと思ってたわよ」

「夢遊病か何かでしょうね。普段から夢見がちですから」

朝食。くれはが作ってくれた洋風メニューを食べながら、後ろに控えるくれはがクスクスと笑うのを感じる。からかわれるのは少し悔しいような恥ずかしいようなんだけど、私の作戦はとりあえず成功だ。くれはは予想通り私の前ではトイレに行かず、早めの朝食を文句も言わず作ってくれた。それどころか、仕込みが間に合わず美味しくないかも、とまで謝つたくらいだ。本当にできたメイドさんだと思う。まあこの後嵌めるんだけど。

「今日は出かけるわよくくれは」

「どちらへ？」

「ショッピングモール」

「……はあ」

もちろん、私が個人的にショッピングモールに行きたいというわけ

ではない。くれはも我慢強いだろうから、そう簡単に我慢する姿何て見せてくれないだろう。計画は綿密に立てている……とはいっても運に任せる部分は多くなってしまうけど。

「んと……これ。あとこれも。これもお願い」

「はい。お持ち帰りです」

「ここで飲むわ」

「え……あ、はい……」

あり得ない量を注文した私を、店員さんがおかしな人を見る目で見ている。軽く十人分は頼んだだろう。それも、飲み物ばかり十数人分。

シヨッピングモールで普通の女子高生のようなことがしたいと言えば、くれはは反対してこない。これを利用して大量に飲み物を頼む。

あんまり興味はないけど、女子高生が飲んでそう甘くて冷たい飲み物ばかり頼んで、二人で飲む。もちろん、くれはが私にそんなに飲ませるはずがないから、きつとくれはが飲んでくれる。

「うん、甘くて美味しいわね。ずっと飲めるわ」

「お嬢様、あまりたくさんお飲みになるとお体に良くないですから」

「頼んじゃったんだもの、仕方ないわ。あ、それもちようだい」

予想通り。くれははいくつかの飲み物を私から遠ざけた。小さなフードコートテーブルに、二人とは思えない数の飲み物、そのほとんどがくれはの前に置かれた。呆れた顔で私が無駄に頼んだそれらを見て溜息をつく。

「こんなに頼んでどうするんですか。飲み切れないでしょうに」

「普通の女子高生はこういうことをするものだ」と聞いたわ。それに、残ったくれはが飲んでくれるでしょう」

「う……ま、まあ、残すのは作った方に失礼ですし……仕方ない……んですかね？」

釈然としなくても、私に無理強いはいしないだろう。それに、即答しない辺り、もしかしたらもうちよつと……感じることもあるのかも。しれない。それも当然、朝私がトイレを妨害した時点で、くれはだって朝起きてトイレに行きたかったはずなんだから。それに加えてこの量の甘い飲み物。それはもう辛いはず。いつもなら即答してもおかしくないのに、少し躊躇ったのがその証拠だ。どことなく私の方を見ていないような気もするし、でもまあ、まだまだ我慢しているというにはほど遠い。私は彼女が、トイレに行きたくて取り乱す姿が見たいのだから。

でもまあそれは別として、目をきつく閉じてあまり好きではない甘味を飲み込むくれはは可愛いし見られてよかった。もちろん期待するのはそれらが吸収されて溜まってきたときだけだ。

「……けほっ……ん、そ、それで、この後は？」

「あ、場所を変えるわよ。そろそろお昼だしここも混むからね」

そう、シヨッピングモールは前座に過ぎない。ここではくれはは水分補給をさせるだけ。お互いお腹が膨れるくらい飲んだし、これで十分だろう。人気が増え、くれはのエプロンドレス……と言うかメイド服が目立ち始めている。まさか往來の前で隠し撮りは出来ないだろうけど、それでも奇異の目で見られるのは腹立たしい。くれはの手を引きフードコートを出る。ちらつと出口のトイレを見た。日曜日のフードコートのトイレだ、やっぱり混んでいる。くれはは……私に手を引かれながらちゃんといってきている。やっぱりまだまだ我慢でき

る。もつともつと待たないと。

「ええ、席はこの一列。ええ、そうよ？悪いけど、隣に人がいるのは嫌なの。何なら正規の値段の三倍払うわ。それとも一ホール貸し切りしましょうか？」

ショッピングモールに続いてやってきたのは、都会の真ん中にある映画館。それも、人が集まるようなものではなく、少しマイナーな映画を放映している小さなところを調べて運転手に指定してある。わざわざここにやってきたのは、ここでもしかやっていないアニメの映画があるからだ。いや、それ自体はどうでも良いんだけど、重要なのはここで見られないということ。つまり、わざわざ屋敷から遠いここまで来る理由になる。交渉の結果一ブロックを貸し切ってくれはの元に戻る。

高速道路を通ってさらに時間が経ったくれはは、人のいないフロアの真ん中でじっと私を待っているけど、どこか落ち着きなく周りを見回している。このトイレを使う権利は貴女には無いのよ、くれは。なんてね。

「買ったわくれは。どうしたの？」

「いえ、何でも。それで、どの映画を？」

「これ。待ってて、飲み物買ってくるから」

「あ、いえ、私は……」

くれはの返事は聞かず、ショッピングカウンターへ。言葉で止めるより

も咄嗟に手を伸ばしてしまったあたり、よっぽど追い詰められていることが解る。もちろん、私がここにいる以上勝手にトイレに行くことはないだろう。待ってても言ったし。向かいながらスマホのインカメラで覗き込む。うーん、手ブレでよく解らない。でも、いつもちゃんと立っているはずのくれはがつま先辺りを動かして地面を蹴っている。目線もぎこちなく地面を向いているようだし、結構キいているんだと思う。ここから追撃だ。カウンターで最大サイズのアイスコーヒートップコーンを買い戻る。

「お待たせくれは。はい、もうすぐ始まるから行くわよ」

「え、ええ……あの、これは……」

「映画に飲み物は不可欠でしょう？長い映画だから大きめのにしたわ」

顔ほどもあるLサイズのコピーを渡し、話しながらもスクリーンに歩き出す。少し口を含む。うえ、苦い。私、これ苦手だ。でもまあ、これに関しては私も飲み干す。私が自ずから買って渡した飲み物だ、残したりはしないだろう。少し早足になってみる。んっ、と後ろから息を呑み絞り出すような声があった。ふうん。ごめんくれは。私も少しは付き合うからね。

映画そのものは、そのアニメも知らない私には退屈なものだった。何も設定が解らないし、キャラも解らない。正直これを二時間も見るのは苦行に等しい。

ただし、隣にくれはがいるこの状況なら別だ。私はスクリーンより隣のくれはに集中している。画面内の爆発音が本当に邪魔だ。

「……っ、ふう……」

SEにかき消されそうに私にだけ、くれはが漏らす吐息が聞こえてくる。私は完全に横を向いているのに、気が付いていないみたいだ。ひじ置きは使わず、両手を太ももに乗せてじっと身体を固めている。いつもの引き締まった唇に変に力が入っているし、さつきから飲み物に全く手をつけていない。ポップコーンはそこそこ減っているし、喉も乾いているはずなのに。きつともうかなりしたくなっちゃってるんだ。でもそれじゃ困る。次の場所で決めなければいけないだし、ここが最後の水分補給なんだから。

ずぞぞぞ、と音を立ててコーヒーを一気に飲む。トイレに行きたいのにコーヒーを飲むのは辛いだろうけど、それは私が買っただけのものなんだから。思い出して貰えるようにわざとらしく。すると、くれはも焦ったようにコーヒーを手にとった。水の入っているカップが音を出して、くれはの手が震えていることが解る。葛藤しているんだ。トイレに行きたくてコーヒーなんて飲みたくないけど、それでも飲まなければいけない。息を呑むのが聞こえた。一瞬大きく俯いて、顔を上げて。カップを両手で持って、意を決してストローを咥えた。

じゅううう……

そう音が聞こえるくらいに、一気に飲み切ろうとしている。私も半分ほど飲むのにかなり苦労したんだけど、それを一息で飲む勢いだ。喉がこくん、こくん、と動いて、悪魔の液体がどんどん身体に入っていく。凛と澄ました横顔が少し歪んでいるのは、苦いからかそれとも。

白々しい私の気持ちは伝わっていないだろうけど、くれはがこっちに視線を向けたので咄嗟に前を向き直して横目に伺う。私だって経験がないわけじゃないから解る。直接注がれるわけじゃないのに、まるで飲み込んだものがそのまま膀胱に増えるみたいに感じるんだ。

ゆっくりとくれはの頭が下がっていく。私が見ていないと気付いて、歯を食いしばり堪えている。朝からトイレに行かず、飲んだ水分はとんでもないことになっている。トイレに行きたくて、それでも私がいるから立つわけにもいなくて。こっそり手を伸ばして彼女の座席に触れてみる。体にビリビリ来る映画の演出とは別に、確かに震えているた。

ぎし、ぎし、ぎし。

一定のペースで席が揺れる。ひっきりなしに横から声にならない声が聞こえてくる。映画と、心臓の音がうるさくて仕方ない。くれはの涼やかな声でまるで喘ぐような声を発している。それも、トイレに行きたい……おしっこがしたいという子供のような理由で、身体を揺すらないと我慢が出来ないくらいに限界が近付いてきているんだ。

もちろん、これで終わりじゃない。ぎし、ぎし、と鳴る椅子から手を離し、一応満足した私の中の変な気持ちを抑えて胸を撫で下ろす。本当に可愛い。今にもお腹に触れて困らせたいくらい。でも、もっともっと我慢してほしい。トイレに行きたくて私に懇願するくらいに。私が許してあげなかったら、彼女はこうするんだろう。

「……んっ」

そんな未来に思いを馳せている間に、私にも来た。くれはほどじゃなくとも、かなりの量を飲んでしまっているし、コーヒーも何だかん

だ半分は飲んでしまっている。そうなれば当然、私もトイレには行きたくなるわけで。屋敷を出た時から行っていないから、気が付かないうちにかなり高まっていた。

正直、かなりキツイ。したいとかじゃなくて、我慢しなきゃと体に咄嗟に力が入ってしまうくらいには、すぐそこまで来ている。あと何時間もはもたないかもしれない。それに、一度気付いた瞬間から急激に高まっているような気がする。スカートの上からももを摩って、気休めでも温まるように。もう少しでいいから我慢できるように。

「は、早く行こ、くれは」

映画が終わった途端、私は早口でくれはを急かして席を立った。その瞬間、お腹に溜まったものが一気に下りてくる。つい少しだけ前かがみになりながら、それでも彼女の手を引いて、向かうのはトイレ……ではなく、出口。

正直今にもトイレに駆け込みたい。いい加減飲み干したコーヒートの半分くらいは間違いない私に襲い掛かってきている。呼吸の度、押されるように一波、一波と襲ってきて、脚を閉じてくれはにだけはバレないように息すら止めて。私の中の冷静な部分が、すぐにもトイレに行けと急かしてきている。つい、一人も並んでいないトイレに目が行ってしまう。私の後ろからついてきているくれはも、何故か急ぐ私に困惑しながら、ちらちらとトイレの方を見ている。そう、したいに決まってるんだ。朝のトイレは済ませた私でさえ、背筋がゾクゾクす

るくらいしたいんだから。所詮六時間ぼっちの私のおしっこよりも、さらに六時間多いくれはの方がもっと辛いはず。

解っていて、私はトイレへの誘惑を振り切って映画館を後にする。すぐに、時間を計っていたのだから私達の車が。

「帰りましょう、くれは。急ぐわよ」

「その、お嬢様、つ、う……」

何か言いたげで、映画館を出てなお未練がましくトイレの方をちらちらと窺うくれはを、半ば押し込むように車に乗せる。驚くくらいに、抵抗する力が弱かった。細身なのに男性にも負けない力があるくれはとは思えないくらい弱弱しくて、余計な力を使ったら我慢できなくなりそうな私でも強引に乗らせることができた。

それで、どこか良くないところの力でも入ったのか、くれはは乗り込んですぐ足をきつく閉じて、手を握り締めて足に置き黙り込んでしまった。揃えたつま先がトントンと動いてしまっていて、何か言いたげに口を開けては唇を噛むかのように閉じる。

「出発して。言った通りのルートで」

「かしこまりました」

運転手にそう伝えて、仕切りを閉める。これでこっちの姿は見えないし音も聞こえない。私達だけの空間だ。向かい合うように座った二人の足がギリギリ触れないほどの距離で、私の足も尿意のあまり揺れる。徐行同然のスピードで走り出したエンジンの細かな振動すら、腰から伝わって細かく水面が揺れずくんずくんとしていく。でも、流石にまだその時じゃない。

移動中の退屈を紛らわせるために私に話しかける、ただそれだけの

余裕もないくれば。小さく縮こまって、ぴったり閉じた足をもじもじとすり合わせてしまっている。今この瞬間も、私以上の波に襲われ、それでもどうしようもなく堪えている。顔を赤くして内側の欲求を堪え、少しでも私に気付かれないようにしているのだろう。もちろんそんなこと無駄なんだけど。私は気付いているんだし。

「……っ……ん、んう……」

呼吸が不安定で、何も救いは無い窓の外を見つめるだけのくれば。じつと見ていれば、時々大きくぶるりと震え、膝を合わせて息を止める。

「渋滞ね、くれば。困っちゃうわ」

「え、ええ、そうですね……やはり、日曜日ですし……」

ぎこちなく笑いかけるくればに隠れて、私は口角を上げた。車の外にはほとんど止まったままの車がずらっと並んでいる。この渋滞も、私が狙った……と言うより、この付近でいくつかイベントが開かれていて、間違はなく混雑、渋滞するのが解つていてこのルートを指定している。お腹で荒れ狂う尿意の波を見せないようにして、というより私も足をしっかりと閉じて彼女の気をギリギリまで逸らした。

「くればは映画、どうだった？ 今女子高生に人気らしいのだけど」

「え……そ、そうですね。最近のアニメは演出が凝っていていいですね。サウンドにも迫力というか惹かれる部分もありました」

「そうよね。とても集中してしまっただ。でも最近の映画館は凄いのね」

「は、はあ……」

話しかけてほしくない、という気持ちがひしひしと伝わってくる。

私も話したくはない。話すとお腹に力が入ってしまい、その、出そうになるのだ。内股に嫌な汗が伝う。くればはもきつと同じだ。足を組み合わせる寸前で、必死に私から隠している。

「見ている間、もちろん音でびりびり来っていたんだけど、それとは別に座席が揺れたのよ」

「そう……なのですか？」

「ええ、カタカタと」

もちろん嘘だけど。私の言葉に反応して体の動きを止めたくには、これ見よがしに腰を座席に押し付けて揺らす。ギリギリに押しかけていた尿意が、ほんの少し引いていく。もう少し我慢しないとけないから、私も助かっている。

「こう、ギシギシ揺れていたの」

「そ……っ、そう、ですか……それはその……良かった……ですね……？」

あからさまにうるたえるくれば。そうだよ、自分がもじもじしていたのが私に伝わっていたとしたら恥ずかしい。だからいったん動きを止めたのだろう。私は最初から動いていませんよ、とでも言いたげに、何でもない風に歪な微笑みを浮かべた。

「ええ、本当に良かったわ。くればは席も揺れていたでしょう？」

「え、い、いえ、その……」

じつと止まったくればをまっすぐ見つめる。今は何とか固まっているけど、私だつてじつとしてるのは相当キツイ。くればはのそれも何秒もつだろうか。内股に閉じた足や少し前かがみになった体勢からどれくらい隠せると思っているのか、凝視する私に何も言わずただ我慢

を続けるくれば。しかしほんの数秒でもう我慢できなくなったのか、じっとしていられずに腰を少し浮かして揺すり始めた。

「……んっ、ふう……」

私が目の前にいるというのに、もじもじと前後に脚を動かす。すらつと背が高く、いつもじっと直立しているくればが、冷静に座ることすらできていない。しわになるんじゃないかと心配になるほど、太もも辺りを握っている。

もしかして、もう前を押さえたいくらいなのだろうか。もう我慢を始めてから何時間経ったか解らない。

「……」

「く……う……んんうっ……」

必死に体をよじり吐息を漏らすくればから目が離せない。私が見たかったのはこれなのだ。一つ胸中のドロドロしたものが消えたような気がした。もう、私が見ていてもじっとしてられないほど取り乱している、あるいは、くればはまだ隠し通せているつもりなのかもしれない。それくらい思考がぐちゃぐちゃになってしまっているんだ。もうすぐ計画は次に進む。もつともっと可愛い姿が見たい。高まり続ける尿意と性欲にも似た衝動を得意のボーカーフェイスに隠して、会話はやめて彼女の痴態を見ることに専念しておく。このぶんならくればの限界の方が早いだろう。そうなるように調整したのだけだ。

「お嬢様、やはりこちらの道は渋滞が長く……もし問題があるようでは

したら他の道を」

「いいわ、このまま行つて。とにかく上の道を直行しなさい」

「かなり時間がかかってしまいましたが……一時間ではきかないくらい

の時間が」

「それでいいわ。待つから」

時間が経ち、三十分ほど。

くればはもう全く隠すことも出来ず、荒く肩で息をしながら腰を座席からずらし、身体ごと左右に揺れ、お尻を擦りつけるみたいにして上半身さえくねくねと捻ってしまっている。衝動に抗うためにはねる体は子供っぽくて、でもくればのプロポーションでされると官能的ですらある。

鉄面皮か、からかうような笑みか、そんな表情しか見たことがなかったくればが、脂汗を浮かべて表情を歪め、しきりに窓の外を気にしている。だけど、そこに救いは無い。この渋滞は最低でも一時間は解消されないし、そんなに我慢できるはずがない。それは私も不可能だ。

くればもそろそろ限界なのだろう。両の手は太ももを越え、脚の付け根にも近いところをさ迷ってしまっている。今にも恥ずかしい部分を直接押さえてしまいうに近付いては、首をゆっくり振って引き戻す。流石にそれはいけないと強く気持ちを持っているんだろう。健気なことだ。

でも、冷たいジェラート、フロート、ドリンクと、Lサイズのアイスコーヒーはくればを許さない。どんなにくればが頑張っても、くればのタンクには今も急激におしっこが送られているはずだ。何度も言

うが、私もそうなのだ。くれはくれはと言ってはいるが、そろそろ私も平静は装えない。足をびつちりと閉じて、踵を上下に上げていないと尿意が落ち着かない。じっとしていられないのは私も同じだ。くれはに余裕が無いからバレてはいないが、もう時間の問題だ。その時が、次のフェーズへの移行の時だ。

この計画をどうするか、一週間前からずっと考えていた。どのルートで動いてどう誘導すればくれはが尿意に悶える姿が見えるだろうか。夜なべして考えたけれど、結局くれはの性格を信じるしかなかった。私の前ではトイレに行かないから、ずっと一緒に行動する。外に出れば安全確保のためほとんど隣にいるはずだ。屋敷を離れた場所ですぐ飲み物を飲ませ、渋滞に巻き込まれる高速道路を狙って通過する。しかし、これだけではまだ足りない。移動に使うこの車は私が移動するためのものだ。結構色々なものが積まれている。

中でも私が何とかしなければいけないのが、この車に備え付けられた携帯トイレである。二つ、確か市販のものだったと思うけど、座席のポケットに備え付けられている。使ったことのないそのアイテムをくれはにも使わせたくないのだ。もちろん、頬を染めて私の目の前で放尿に及ぶくれはは見てみたい。車の隅に下がり、こちらを確認しつつ服を捲るなりして携帯トイレを使い、尿意に負け意を決して音を立てておしっこをしよう……。あ、ちよつと、いったんおしっこの想像はやめよう。私が辛い。気持ちを入れ直して波を押し返す。バレていないかとくれはを見たけど、自分が我慢するのに精いっぱいではない余裕は無さそう。

それで、まあくれはに使わせないために、私が使う。二つある携帯

トイレを使用不能にするために、私も何故か今我慢しているわけ。ちなみに、もうそろそろその時が来るんじゃないかと思っている。と、いうかいい加減私が限界だから、来てくれないと困る。

少し様子を窺う。こちらをちらちらと見ながら、口を開きかけては閉じることを繰り返している。きつともう限界で、いつ私に言い出そうか、本当に言い出しているのかと考えているはずだ。どんなに困っていても、解決策は無い。私の前で、この狭い空間で済ませてしまいうしか救いは用意されていない。普段は私に、トイレに行かないように振る舞うくれはが、ここで我慢が出来ないと申告して、ここでおしっこをする。限界寸前の膀胱とは関係無く、その姿を想像して胸の内が熱くなってくる。

「……あの、お嬢様。あとどのくらいで屋敷でしょうか……？」

「ん？ まあ……あと二時間くらいかしらね。渋滞も長いし……東京から屋敷までかなり時間がかかるだろうし」

「あと……二時間……」

自分で聞けばいいのに、もう座席から動くこともできないのかもしれない。現実的な私の知らせに、汗ばんだ美麗な顔が刺していた。そんなに我慢が出来ないと思っているのだろう。しかし、そんなことを私に言ってくるなんて、もうどうしようもないんだろう。いったん深呼吸を挟んで、心を落ち着かせる。私の欲求と作戦、どちらも満たすためにタイミングが重要だ。顔に影を翳したくれはが何かを覚悟して口を開く。

「お、お嬢様、その、私、こんなことを今言うのは、申し訳なく思うのですが……」

「……奇遇ねくれは。私も少し話したいことがあるのよ」

「い、いえ、私、少し余裕が無くて、その、わ、私から先に……」

「いえ、私から言わせて。その後でいいかしら、くれは。お願い」

もうかなりきついけど、最後の精神力を振り絞って笑顔を作る。ここだ。そろそろ私も済ませないと、もじもじくれはを楽しむ余裕も無くなる。

「では、お嬢様、すみません、お早めに……」

「実はね、結構前からお手洗いにいきたいの」

「は……？」

口をあんぐりと開けくれはが止まってしまった。いや、両足はずつともじもじと擦り合わせてしまっているし、お尻を座席に擦り合わせるように身をよじらせるのは止められないけど、表情と思考は固まったはずだ。くれはだって車の携帯トイレはもちろん把握しているはず。それを私に譲らなければいけない可能性。それがあるだけでどうしようもなく絶望してしまうだろう。だから私も、恥じることなく追い詰めていける。

「実は、映画を観ているときから行きたくて……その、もう我慢できそうにないの。だから、悪いんだけどここでしちゃうから、車の携帯トイレ、私に取ってくれる？ くれは。」

私の言葉を聞いているのかいないのか、下唇を噛むようにしてくれはが俯いた。もしかして、この言葉で心が折れてしまってもうお漏らし、なんて心配にはならない。だって、くれはなのだから。どんな時も冷静で、私に忠実で。自分に厳しくて、いつも私を中心に考えてくれる強い子だから、ここでお漏らしなんてしないわよね、くれは？

「……はい……」

何を考えているのかは今のところ解らない。それでもくれはは忠実に、物入れから携帯トイレを取り出してきた。それを見たくれはの喉が鳴ったのがはつきりと解る。目の前にある救いを見て、揺れている。これも見たかった。全て私を優先してくれるはずのくれはが、お漏らしの危機に陥って欲望に負けそうになる姿。震える手で二つ取り出し、両手に持つて比べるように見ている。

それをどうするの、くれは。

「……お、お嬢様」

「ごめんねくれは。私、もう余裕が無いの。話なら……まあ、すぐに終わるなら今してちょうだい？」

「それが、その……」

煮え切らないくれは。ふふ、どんなふうに言ってくるのかしら。まずは謝る？ それとも最初から懇願してくれるのかしら。

「わ、私もその……済ませて、おきたくてですね……」

「何を？」

「…………おし……小用を……」

背筋が震える。あのくれはが、私におしつがしたいと言ってしまった。これまで一度もそんなこと言わなかった彼女が、尿意に堪えかね、これまでのものを投げ捨てても私の前でおしつをしようとしている。

それを言えば、させてもらえろと思ってしまったのだろう。両手の携帯トイレはもう、私に寄つてすらいらない。渡すつもりは無いと思われても仕方ないわよ、くれは。

◇ 参加者紹介 ◇

●もちづきうずめ @ https://twitter.com/scuzume_at
 社会不適合を認めるうんこマン。今年はお嬢様とメイドちゃんのおしっこイヤーだとにらんで企画した上に、最強のおしっこ小説アカウンターオーを集結させた傑作なので、きつとんでもない冊数を頒布できているはず……！ なおコミケは中止の模様。

pixiv : <https://www.pixiv.net/users/28257570>

●A J @ https://twitter.com/203_kerty

少女排泄表現開発事業団職員 兼 Lolisca Library 管理人の AJ です。普段は大きい方を書いてます。主従百合と聞いて、「あの娘にキスと白百合を」の園芸部みたいな感じを書こうと当初は思っていたのですが、何故かゆゆ式OVAのタイトルに落ち着きました。「困らせたり、困らせたり」っていいですね。

pixiv : <https://www.pixiv.net/users/2312181>

HP : Lolisca Library <http://lolisca827.sakura.ne.jp/>

●軟球じるふ @ <https://twitter.com/nainainojinsi>
 社会の荒波に揉まれながら少女たちの荒波に苦しむ姿を想像する者だ。今回も呼んで頂いてありがとうございます。

pixiv : <https://www.pixiv.net/users/16115594>

●にゃこ @ <https://twitter.com/nyanpoyooyo>

にゃこと申します。そうそうたるメンバーに、私を加えていただけ事はとても光栄に思うと同時に、大変なプレッシャーを感じる事になりました。あふれ出るおしっこ愛を受け止めて欲しい、そういう思いで頑張りましたので、楽しんでいただけると幸いです。

pixiv : <https://www.pixiv.net/users/32978443>

●ゆつきゅん @ https://twitter.com/hold_yu_kyun

やはり私はお嬢様メイドさんが好きなのだと感じていますわ。やはりその魅力は主従関係や、身分が高いということから発生する特別なプライドや行動ですわね。メイドさんにしても、やはり忠誠心から来るものが良いですね。まあ私はお嬢様でもメイドでもないのよく解りませんが。オーッホッホッホッホッ！

pixiv : <https://www.pixiv.net/users/6463804>

●毒桃 @ <https://twitter.com/dnmononga>

本稿ではあとがきイラストをいただいています。DLしてね！

pixiv : <https://www.pixiv.net/users/1271176>

●まよ @ https://twitter.com/k868686_k

この度は素敵な作品にご尽力出来て光栄でした！
 普段描かないタイプのキャラクターを描かせていただいたのでとてもいい経験になりました。ありがとうございます。

SKIMA : <https://skima.jp/profile?id=89186>

今回も参加させていただきました～☆なんと三冊目！
皆様の聖水への熱い想いが詰まったこの本は
コロナにも負けない(禍々しい)パワーに満ち溢れており
元気になること請け合いです！(特に下半身)

毒桃



お嬢様とメイドちゃんのおしっこ小説誌

ミルクレープ 試し読み版

[小説] もちづきうずめ A J 軟球ごるふ

にゃこ ゆっきゅん

[イラスト] 毒桃 まよ

サークル『C R もちづきうずめ』

2020年 5月 12日 電子版第1刷発行

初出イベント D L S i t e 様配信（電子版）

★頒布価格／1000円（書籍版価格）

発行者：もちづきうずめ

印刷所：

連絡先：mochiuzu@gmail.com

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になります。
また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、
いかなる場合でも一切認めません。

無断でインターネットなどへのアップロードを発見した場合、
DL数×頒布価格請求しますことを申し添えておきます。

@UZUME MOCHIDUKI 2020 Printed in Japan

恥ずかしい、我慢、もじもじ、秘密。
お嬢様とメイドちゃん
“おしっこ……したい”
が甘く積み重なる——

能力ノ。おねしよお嬢様と蕩けるメイドちゃん／もちづきうずめ

困らされる幸福／AJ

アナタの気持ち、ワタシの気持ち／軟球こるふ

さよ様のおしっこ事情／にゃこ 絵：まよ

不運な彼女と幸運でもない私／ゆっきゃん

表紙：毒桃

ミルクレープ【Mille-crapes】

お嬢様とメイドちゃん

Lady's & Maid's
Peeking Anthology

おしっこ小説誌

発行サークル

CRもちづきうずめ